真庭市埋蔵文化財調査報告２

大旦遺跡発掘調査報告

市道上連線改良工事
に伴う発掘調査

2009

真庭市教育委員会

巻頭図版

調査区全景空撮（南西から）

序

大旦遺跡は、真庭市内でも比較的古くからその存在が知られてきた遺跡であり、一部については市指定史跡になっています。これまでも圃場整備事業に関連する発掘調査が県により実施され、市内でも屈指の大規模な遺跡であることが判明しています。

このたび市道上連線の改良事業に伴い大旦遺跡の取り扱いについて関係部局と協議を重ね、その結果記録保存の措置を講じるための発掘調査を真庭市教育委員会として実施しました。調査の結果、これまであまり知られていなかった古墳時代前期の遺構・遺物をはじめとする様々な考古学的な成果を得るにいたりました。このことは、今後真庭市の原始・古代の歴史を考察していくうえでの大変重要な資料を加えることになりました。

この報告書が学術研究に寄与するだけでなく、埋蔵文化財の保護・保存に対する理解を深めるうえで、広く活用されることを期待します。

最後になりましたが、発掘調査の実施および報告書の作成にあたり、関係各位の皆様から多大なご協力をいただきました。末筆ではありますがここに記して厚くお礼申しあげます。

平成21年３月

真庭市教育委員会
教育長　大倉　貢

例　言

1　本書は、市道上連線改良事業に伴い、真庭市建設部建設課の依頼を受け真庭市教育委員会が発掘調査を実施した、真庭市台金屋122-2外に所在する大旦遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、平成18年度(12～3月)に池上　博・坂田　崇・新谷俊典が担当して実施した。調査面積は1,290㎡である。

3　本書の執筆・編集は坂田が行った。

4　調査にあたっては、現地に於いて河本　清(くらしき作陽大学)、安川豊史(津山市教育委員会)、谷岡清孝・森上知洋(真庭市文化財保護審議会委員)、白石　純(岡山理科大学、真庭市文化財保護審議会委員)、船津昭雄(地元郷土史研究家)の各氏より、出土遺物のうち金属製品については行田裕美氏(津山市教育委員会)よりご教示を得た。記して感謝の意を表する次第である。

5　遺跡の空撮はフジテクノ有限会社に委託し実施した。

6　出土遺物・図面・写真等は、真庭市教育委員会(真庭市落合垂水1901-5)にて保管している。

凡　例

1　本書で用いた高度は海抜高であり、方位は真北である。

2　第２図は国土地理院発行の1/25,000地形図の横部・美作宮原・勝山・久世を使用し加筆したものである。

3　本書に掲載した遺構・遺物実測図の縮尺率は下記により統一している。

遺　構

竪穴住居：1/80　　土壙：1/40

遺　物

土器：1/4　　石器：1/2・1/4　　金属器：1/2

4　本書の遺構配置図に示す遺構名は、原則として下記に示す略称を用いた。

竪穴住居：住　　土壙：土

5　遺構番号は、遺構の種類ごとに1から通し番号を付した。

6　遺物番号のうち土器以外のものについては、その材質を示すため番号の頭に次に示す略号を付した。

石器：S　　金属器：M

7　土器の実測図のうち、中軸線の左右に白抜きのあるものは、小破片のため口径の測定が困難なものである。

8　遺構図における、焼土の分布範囲、被熱(赤変)範囲については下記のトーンで表現した。

焼土範囲　　被熱(赤変)範囲

目　次

巻頭図版
序　文
例　言
凡　例
目　次
第１章　地理的・歴史的環境 …… 1
第２章　調査の経緯と経過 …… 4
第１節　調査の契機と経緯 …… 4
第２節　発掘調査の経過 …… 5
第３章　発掘調査の概要 …… 7
第１節　遺跡の概要 …… 7
第２節　遺構・遺物 …… 9
1　竪穴住居 …… 9
2　土壙 …… 20
3　遺構に伴わない遺物 …… 24
第４章　まとめ …… 26

遺物観察表
図版
報告書抄録
奥付

図　目　次

第１図　遺跡位置図 …… 1
第２図　周辺遺跡分布図(1/25,000) …… 2
第３図　確認調査トレンチ配置図(1/2,000) …… 4
第４図　調査区位置図(1/1,000) …… 6
第５図　遺構配置図(1/400) …… 8
第６図　竪穴住居1・2(1/80) …… 9
第７図　竪穴住居1・2出土遺物(1/4・1/2) …… 10
第８図　竪穴住居3(1/80)・出土遺物(1/4・1/2) …… 11
第９図　竪穴住居4(1/80)・出土遺物(1/4) …… 11
第10図　竪穴住居5(1/80)・出土遺物(1/4) …… 12
第11図　竪穴住居6(1/80) …… 12
第12図　竪穴住居7・土壙15・16(1/80)
竪穴住居7出土遺物(1/4) …… 13
第13図　竪穴住居8(1/80)・出土遺物(1/4) …… 14
第14図　竪穴住居9(1/80) …… 15
第15図　竪穴住居9出土遺物①(1/4) …… 16
第16図　竪穴住居9出土遺物②(1/4) …… 17
第17図　竪穴住居10(1/80) …… 18
第18図　竪穴住居11(1/80)・出土遺物(1/4) …… 18
第19図　竪穴住居12(1/80) …… 18
第20図　竪穴住居13(1/80)・出土遺物(1/4) …… 18
第21図　竪穴住居14(1/80)・出土遺物(1/4・1/2) …… 19
第22図　竪穴住居15(1/80)・出土遺物(1/4) …… 19
第23図　土壙1・2(1/40) …… 20
第24図　土壙3(1/40)・出土遺物(1/4・1/2) …… 21
第25図　土壙4・5(1/40)・土壙5出土遺物(1/4) …… 21
第26図　土壙6・7(1/40)・出土遺物(1/4) …… 21
第27図　土壙8・9(1/40) …… 22
第28図　土壙10・11(1/40)・出土遺物(1/4) …… 22
第29図　土壙12・13・14(1/40)・出土遺物(1/4) …… 23
第30図　土壙17・18(1/40) …… 23
第31図　包含層等出土遺物(1/4・1/2) …… 25

図　版　目　次

巻頭図版　調査区全景空撮(南西から)
図版1　1　調査区全景空撮
　　2　竪穴住居1・2切合い関係検出状況(東から)
　　3　竪穴住居1(東から)
図版2　1　竪穴住居2(東から)
　　2　竪穴住居3・土壙5(東から)
　　3　竪穴住居4・土壙6・7(北から)
図版3　1　竪穴住居5(西から)
　　2　竪穴住居6(西から)
　　3　竪穴住居7(南西から)
図版4　1　竪穴住居8(南から)
　　2　竪穴住居8遺物出土状況(北から)
　　3　竪穴住居9覆土断面(南から)
図版5　1　竪穴住居9中央部付近遺物出土状況(東から)
　　2　竪穴住居9遺物出土状況(南から)
　　3　竪穴住居9遺物出土状況(西から)
図版6　1　竪穴住居9(南から)
　　2　竪穴住居10(南から)
　　3　竪穴住居11(北東から)
図版7　1　竪穴住居12・13(南西から)
　　2　竪穴住居13焼土・炭化材検出状況(南東から)
　　3　竪穴住居14(南から)
図版8　1　竪穴住居15(南から)
　　2　土壙10・11遺物出土状況(北東から)
　　3　土壙10・11(北東から)
図版9　1　土壙15(南西から)
　　2　土壙16(北東から)
　　3　土壙18(西から)
図版10　竪穴住居2・8・9出土遺物
図版11　竪穴住居9・14・土壙11出土遺物
図版12　縄文土器
図版13　1　石器
　　2　金属器

第１章　地理的・歴史的環境

真庭市は岡山県北部の旧美作国西部に相当し、東は津山市・鏡野町・美咲町、西は新見市・新庄村、南は高梁市・吉備中央町、北は鳥取県とそれぞれ境を接している。面積は828.43㎢と目下のところ県下市町村中最大であるが、面積の大半は山林が占めている。

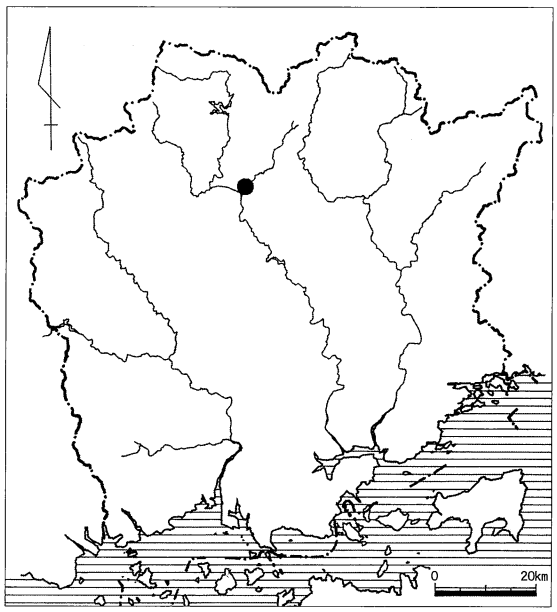
大旦遺跡の所在する真庭市台金屋地区は真庭市域の南半部東部にあたり、岡山県の中央部を南流する旭川の上流域に位置している。旭川は久世の市街地で流路を東から南に大きく蛇行するが、これは北から南に延びる河岸段丘が突き出しているためである。この段丘の東には旭川の支流である目木川が市街地の東端で本流の旭川と合流している。この旭川と目木川の合流によって形成された沖積平野は久世地区における最も大きな平坦地形であり、現在主要な集落はこの平野に立地している。

大旦遺跡はこの旭川と目木川によって形成された沖積平野を南に望む標高約180m(沖積平野との比高差約40m)の低丘陵上に位置し、市内でも屈指の大規模な集落遺跡であるとみられる。

縄文時代　久世地域において現在まで知られている最古の遺物は縄文時代早期の押型文土器で、この大旦遺跡[1]のほか上野遺跡[2]、薬王寺西山遺跡[3]、長光寺山遺跡[4]などで発見されている。上野遺跡では前期の土器も採集されている。中期では目木川上流の江森遺跡[5](余野上遺跡)が知られるのみである。後期では上野遺跡、三坂川流域の三栄神社裏山遺跡[6]、小谷川流域の宮芝遺跡[7]、晩期では五反遺跡[8]で鉢形土器が出土しているほか、旦山遺跡と惣台遺跡[9]から落とし穴遺構が検出されている。いずれの場合も河川を見下ろす丘陵上に複合して認められる場合が多い。

弥生時代　弥生時代になると、五反遺跡で前期後葉の土器が出土しているのみで、集落遺跡が飛躍的に増加するのは中期後葉から後期前葉にかけてである。主要な遺跡としては、目木川流域では旦山遺跡、惣台遺跡、野辺張遺跡[10]、木谷遺跡[11]、上野遺跡などがあり、目木川と旭川に挟まれた地域では五反遺跡、大旦遺跡、宮芝遺跡などがある。しかしながら比較的大規模な弥生時代の集落跡が展開しているにもかかわらず、弥生時代の墳墓については現在まで知られていない。

古墳時代　古墳時代に入ると数多くの古墳が各水系を見下ろす丘陵上に築造されるようになる。前方後円墳としては小規模ではあるが、惣古墳群のアタゴ山５号墳と堂ノ旦１号墳が知られている。５世紀の中葉には古墳の築造が活発となり、中原古墳群[12]のように低平な墳丘の方墳・円墳が丘陵尾根上に多く築かれるようになる。後期には各所に群集墳が形成されるようになる。特徴的な成果のあった調査例としては、装飾付脚付子持壷やトンボ玉などの多彩な遺物が出土した木谷古墳群11号墳が挙げられる。集落跡としては、前期について



第１図　遺跡位置図

1	**大旦遺跡**	16	木谷古墳群・木谷遺跡	31	丸山古墳群	46	羽庭６～８号墳
2	五反遺跡	17	イガ平１号墳	32	上の段遺跡	47	池河内遺跡
3	五反廃寺	18	アタゴ山古墳	33	アタゴ山古墳群	48	茶臼山城跡
4	五反１号墳	19	宮ノ叺１～３号墳	34	鍋屋遺跡	49	三坂１～４号墳
5	長光寺１～６号墳	20	旦山１～５号墳	35	稲荷神社裏山遺跡	50	郷庄尻遺跡
6	蛇ノ尾１～３号墳	21	旦山遺跡	36	多田１～11号墳	51	野田遺跡
7	新池１～６号墳	22	野辺張遺跡	37	平ノ上遺跡	52	東坊子遺跡
8	細シ遺跡	23	先旦山遺跡	38	池河内遺跡	53	野田１・２号墳
9	多田須遺跡	24	樋ヶ鼻遺跡	39	真光寺前古墳	54	小谷１～４号墳
10	西口遺跡	25	惣台遺跡	40	上ヶ市遺跡	55	羽庭１～５号墳
11	金屋１～４号墳	26	三崎１～８号墳	41	宮芝遺跡		
12	目木埋没条里	27	篠向城跡	42	小谷古墳群		
13	戸坂遺跡	28	篠向1号墳	43	小谷遺跡		
14	上ノ山遺跡	29	富尾埋没条里	44	羽庭14～18号墳		
15	引屋敷遺跡	30	井ノ上遺跡	45	羽庭城跡		

第２図　周辺遺跡分布図（1/25,000）

は今回の大旦遺跡の調査で住居跡等を検出したのが初の事例であり、従前までは知られていなかった。なお、後期の集落跡は惣台遺跡や先旦山遺跡[13]でこれまでに確認されている。

古代以降　白鳳時代には五反廃寺[14]が造営される。五反廃寺は大庭臣により造営されたと考えられ、美作国の最西端に所在する古代寺院跡である。周囲からは軒丸瓦、軒平瓦、鴟尾が出土しており、軒丸瓦は現在のところ７種類、軒平瓦は６種類が確認されている。なかでも内区に木の実状の文様、菊花状の文様を配置した瓦当文様は県内では類例を見ないものである。寺域は１町四方の説が今日では有力である。

一方、吉備五郡に白猪屯倉を置いたと記している『日本書紀』や『続日本紀』などから旧大庭郡内に白猪屯倉が設置されていた、という説もあるが定かではない。また、大旦遺跡から東へ約１km隔てたところには、10数点の墨書土器、陶製円面硯および獣足壷の脚部が出土し、大庭郡衙跡に比定されている西口遺跡[15]が所在している。その他、古代の耕地割制度といわれる条里が久世地区でも４ヶ所で確認されているが、目木の条里[16]は中世に区画された耕地割の可能性が指摘されている。

註

(１)「大旦遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』57　岡山県教育委員会　1984
(２)「上野遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』91　岡山県教育委員会　1994
(３)松本和男・船津昭雄「第２章　久世の夜明け」『久世町史』久世町　1975
(４～８)註３に同じ。
(９)「旦山遺跡・惣台遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』136　岡山県教育委員会　1999
(10)「野辺張遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』136　岡山県教育委員会　1999
(11)「木谷古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』93　岡山県教育委員会　1995
(12)「中原古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』93　岡山県教育委員会　1995
(13)「先旦山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』136　岡山県教育委員会　1999
(14)「五反廃寺」『久世町埋蔵文化財発掘調査報告』２　久世町教育委員会　1997
　「五反廃寺」『久世町埋蔵文化財発掘調査報告』４　久世町教育委員会　2000
(15)註３に同じ。
(16)『目木条里発掘調査報告書』久世町教育委員会　1982

第２章　調査の経緯と経過

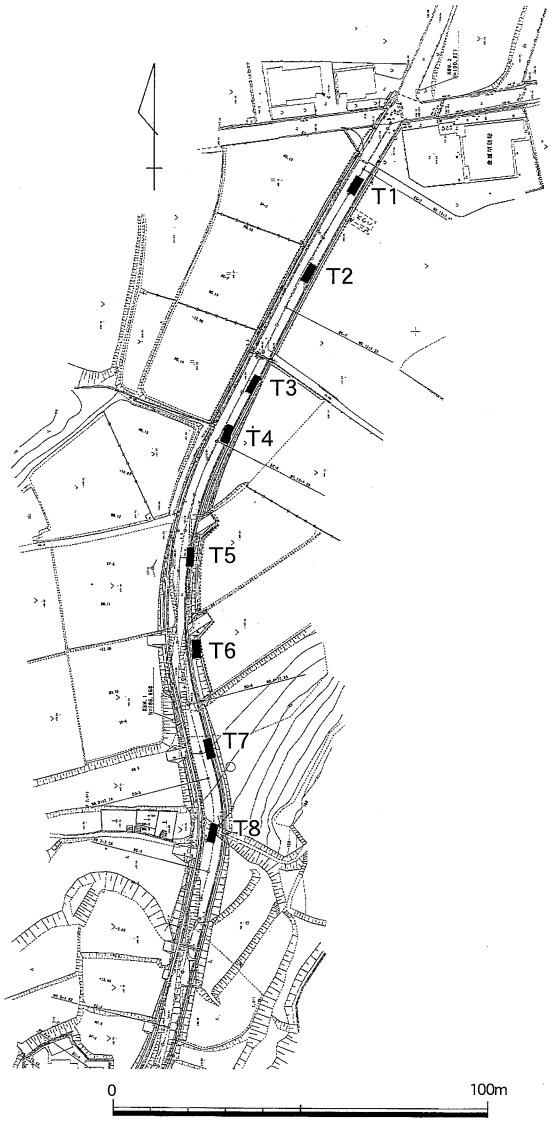
第１節　調査の契機と経緯

旭川と目木川の合流によって形成された沖積平野は久世地区における最も大きな平坦地形であり、真庭市のなかでも主要な集落遺跡はこの平野に立地している。大旦遺跡はそのうちの主要な遺跡のひとつである。

大旦遺跡の所在が知られることとなったのは、昭和29(1954)年に耕地整理を兼ねて瓦製作用の粘土を採掘していたところ弥生時代の貯蔵穴が検出され、緊急の調査が行われたことを契機とする。このときには９基の貯蔵穴が検出・確認され、その個所は昭和38(1963)年に久世町(現真庭市)指定史跡に指定されている。

昭和56(1981)年には台金屋地区一帯で「農村総合整備モデル圃場事業」を実施する計画が立ち上がり、それを受け、岡山県教育委員会による確認調査が昭和58(1983)から翌年にかけて実施されることとなった。その結果、縄文時代早期から古代にかけての遺構・遺物を多数検出・出土しており、時代・面積ともに大変広範囲な集落遺跡であることが判明した。

平成17(2005)年、真庭市教育委員会は真庭市建設部建設課より、大旦遺跡の範囲内で市道上連線改良事業を実施する計画のある旨、協議を受けた。包蔵地の現状保護・保存を原則として協議を重ねたが、構造設計上の理由により計画変更等は不可能、という事業主体者側からの結論に対し、着工にあたってはやむをえず事前の発掘調査を実施することを条件に合意をした。真庭市建設課から真建設第354号で埋蔵文化財発掘の通知が平成18(2006)年３月９日付けで提出され、これを受けて、真庭市教育委員会を主体としての発掘調査を実施することとなった。



第３図　確認調査トレンチ配置図(1/2,000)

第２節　発掘調査の経過

真庭市建設課からの埋蔵文化財発掘通知を受け、大旦遺跡の発掘調査を実施することとなった。まず、本調査の実施が必要な対象範囲を確定するため、平成18(2006)年12月11日から28日までの期間でトレンチによる確認調査を実施した。

道路建設計画地内に２×５ｍのトレンチを、T-１～T-８までの計８ヶ所に設定し(第３図)、遺物の包含状況ならびに遺構の遺存状況を確認した。調査の結果、T-１～T-６では弥生土器や土師器等、多量の遺物の出土が見られ、またT-１、T-２、T-６においては竪穴住居等の遺構を確認することができた。なお、T-７、T-８については旧地形が削平等により大幅に改変されている模様で、遺構・遺物包含層ともに認められず、T-7の周辺より以南の区域については発掘調査を要さないものと判断した。

以上、確認調査の結果から本調査の実施が必要な範囲を、T-６を設定した畑地から以北の範囲と定め、引き続き本調査を実施していくこととなった。

発掘調査は翌平成19(2007)年の１月15日から開始し、３月23日までの期間、実働日数42日間を要して実施した。なお、埋蔵文化財発掘調査の報告については平成19年(2007)１月26日付け、真教教第519号で提出している。

確認調査の結果から遺構・遺物ともに相当量を検出・出土することが予測されたため、表土除去については重機を使用した。また、調査の終盤においてはラジコンヘリを使用しての空撮も実施している。

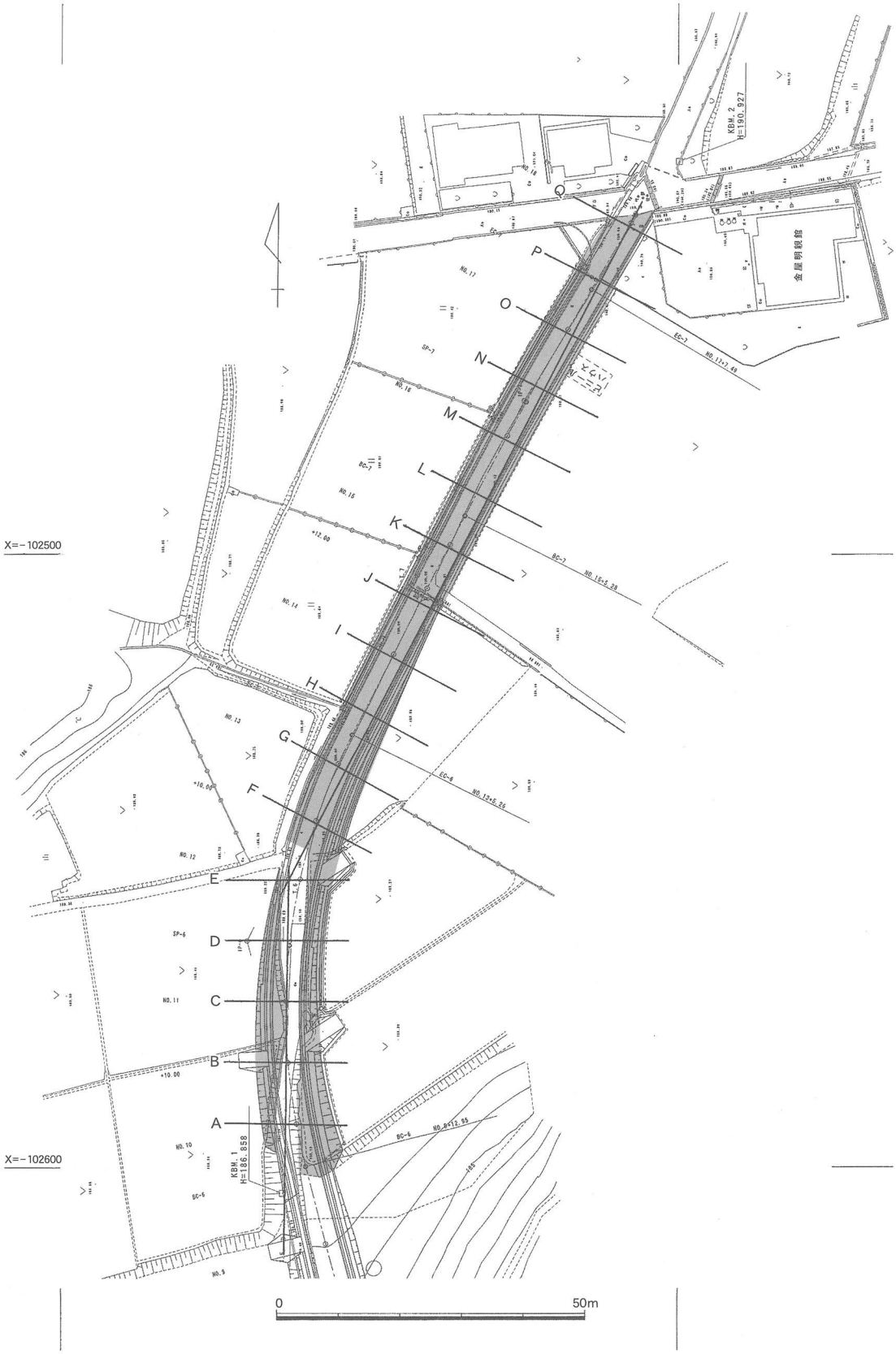
なお、現地説明会を３月10日に実施した。

(調査の体制)

調査主体者	真庭市教育委員会	
事務局	真庭市教育委員会	
	教育長	大倉　貢
	教育次長	樋口正三
	教育総務課長	美甘宗章
	総括参事	三船光夫
調査担当者	主幹	池上　博
	主査	坂田　崇
	上級主事	新谷俊典
作業員	池田　功、池田康子、奥田昭江	
	奥田　章、奥田佐智子、川端伊子	
	黒瀬　肇、竹林正馬、為本和男	
	為本由利子、二宗久夫、樋口千秋	
	村松正治、門城恭子（50音順）	

調査風景

現地説明会の様子



第４図　調査区位置図(1/1,000)

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概要

今回発掘調査を実施した区域は、大旦遺跡の概ね中心部にあたる。対象範囲が道路建設の予定地であることから、遺跡の一部に東西幅４～８ｍ、南北長約160ｍの長大なトレンチを設定した様相を呈するものとなった。調査面積は1,290㎡である。

調査対象となった区域は、台金屋地区の所在する丘陵上の比較的平坦なところである。標高としては188.0～190.5ｍの範囲になる。

調査区はＥ区とＦ区の境を基準とし、そこから南北それぞれの方向へ10ｍごとに区切り、その結果南から北に向けてＡ～Ｑの17区を設定した。なお、Ａ～Ｅ区は現道を挟んで分かれることからそれぞれの区の東部・西部と呼称することとした。

調査対象地は基本的に畑地および未舗装の市道であったことから、遺構検出面までの堆積土は黒ボク土が主体であった。Ｄ・Ｅ区のあたりは地表までの堆積土が薄く、そのため現代までの耕作による撹乱が遺構に対して影響をおよぼしている。Ｇ区から北に向けては黒ボク土の堆積が厚くなり、深いところでは地表から１ｍを超えている。黒ボク土の堆積は調査区の北端へ近づくに従い順次薄くなり、Ｐ区のあたりでは道路のバラス層を剥いだ直下で検出面が露呈するほどであった。このことから、Ｈ・Ｉ区の辺りは旧地形では東から西に向かう谷地形であり、その谷を境にそれぞれ南北に微高地を形成し、その上に集落が形成されていたものとみられる。

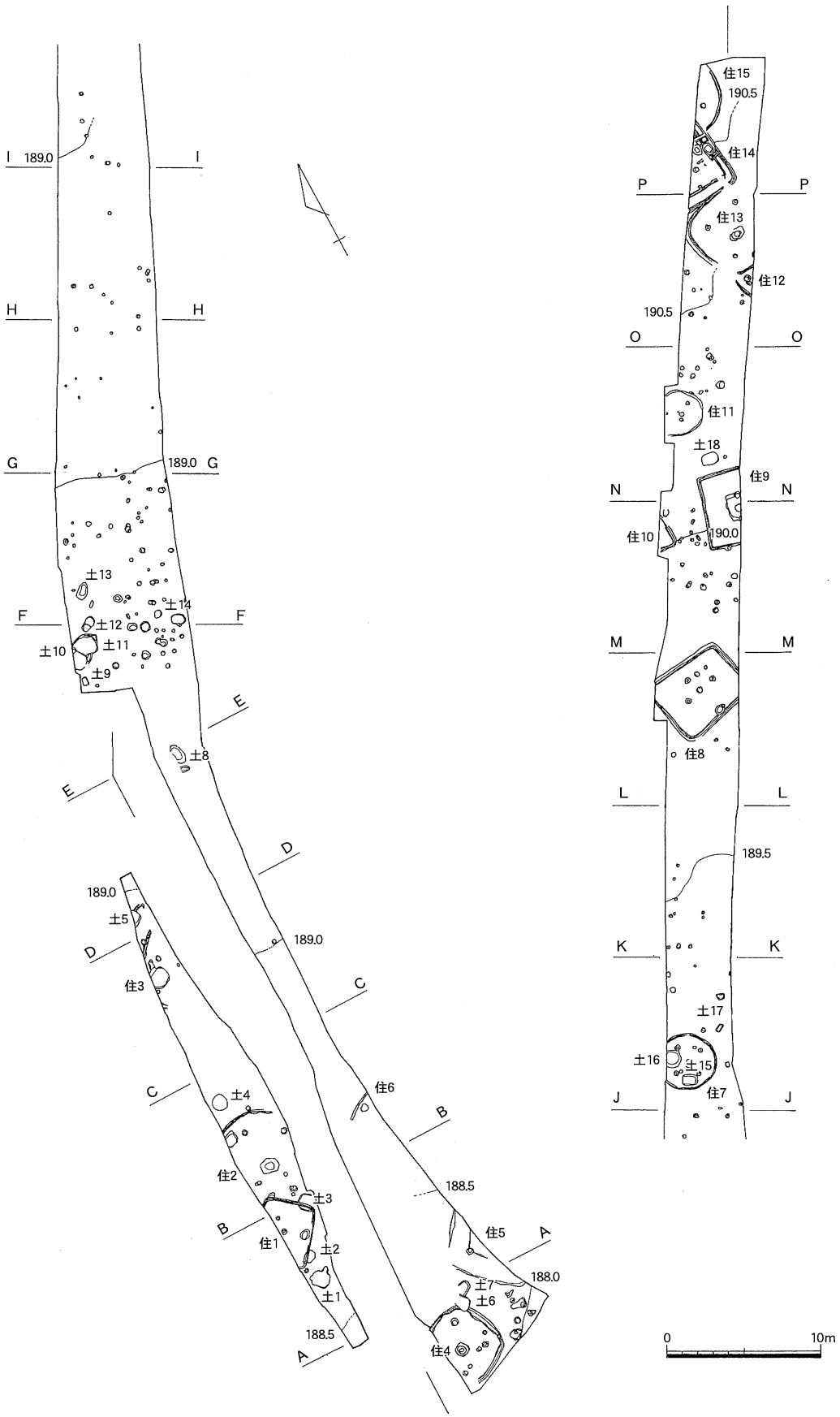
調査の結果、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺構を検出している。遺構としては15軒の竪穴住居と18基の土壙およびピット類を確認している。遺構の配置については、竪穴住居はＡ～Ｃ区で竪穴住居１・２・４～６の５軒、Ｐ・Ｑ区で竪穴住居12～15の４軒、Ｎ・Ｏ区に竪穴住居９～11の３軒と比較的集中しており、その他の竪穴住居３はＤ区、竪穴住居７はＫ区、竪穴住居８はＭ区にそれぞれ単独的に位置している。Ｅ～Ｊ区では竪穴住居遺構は確認されず、土壙およびピット類を検出するにとどまっている。土壙・ピット類はＦ・Ｇ区に集中しており、Ｈ～Ｊ区はピット類も比較的疎らになる。

竪穴住居は概ねその形態から、円形４軒(竪穴住居２・７・11・15)、胴張りの隅丸方形２軒(竪穴住居４・13)、方形６軒(竪穴住居１・５・８～10・14)、不明３軒(竪穴住居３・６・12)に分類される。

土壙についてはその多くが遺物を出土していないことから時期・用途等について不明であるが、いくつかのものについては貯蔵穴としての機能を類推できるものがある。

ピット類については検証を試みたが、建物等を復元できる組み合わせは見いだされなかった。

遺物としては、土器では弥生土器・土師器を中心に、包含層等から若干の縄文時代の押型文土器が出土している。土師器については竪穴住居８・９において、遺構の時期を明確に示すものとして一定のまとまりをもって出土している。石器については磨製石庖丁や砥石等が、また金属器についても鉄器が若干数ではあるが出土している。



第５図　遺構配置図(1/400)

第２節　遺構・遺物

１　竪穴住居

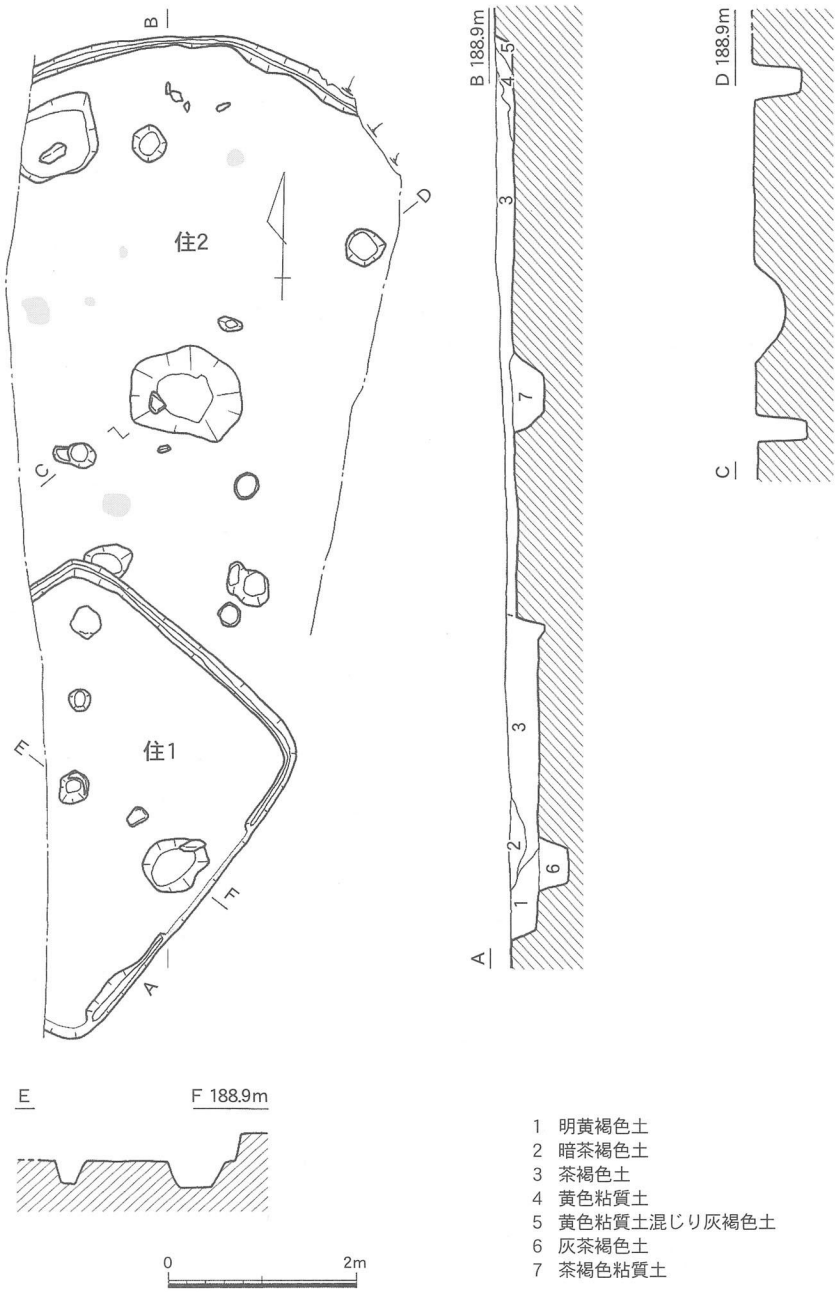
竪穴住居１（第５～７図、図版１）

Ｂ区西部で検出された住居のうちで、最も南に位置する。竪穴住居２と重複しており、竪穴住居２の廃絶後に竪穴住居１が設けられたものとみられる。

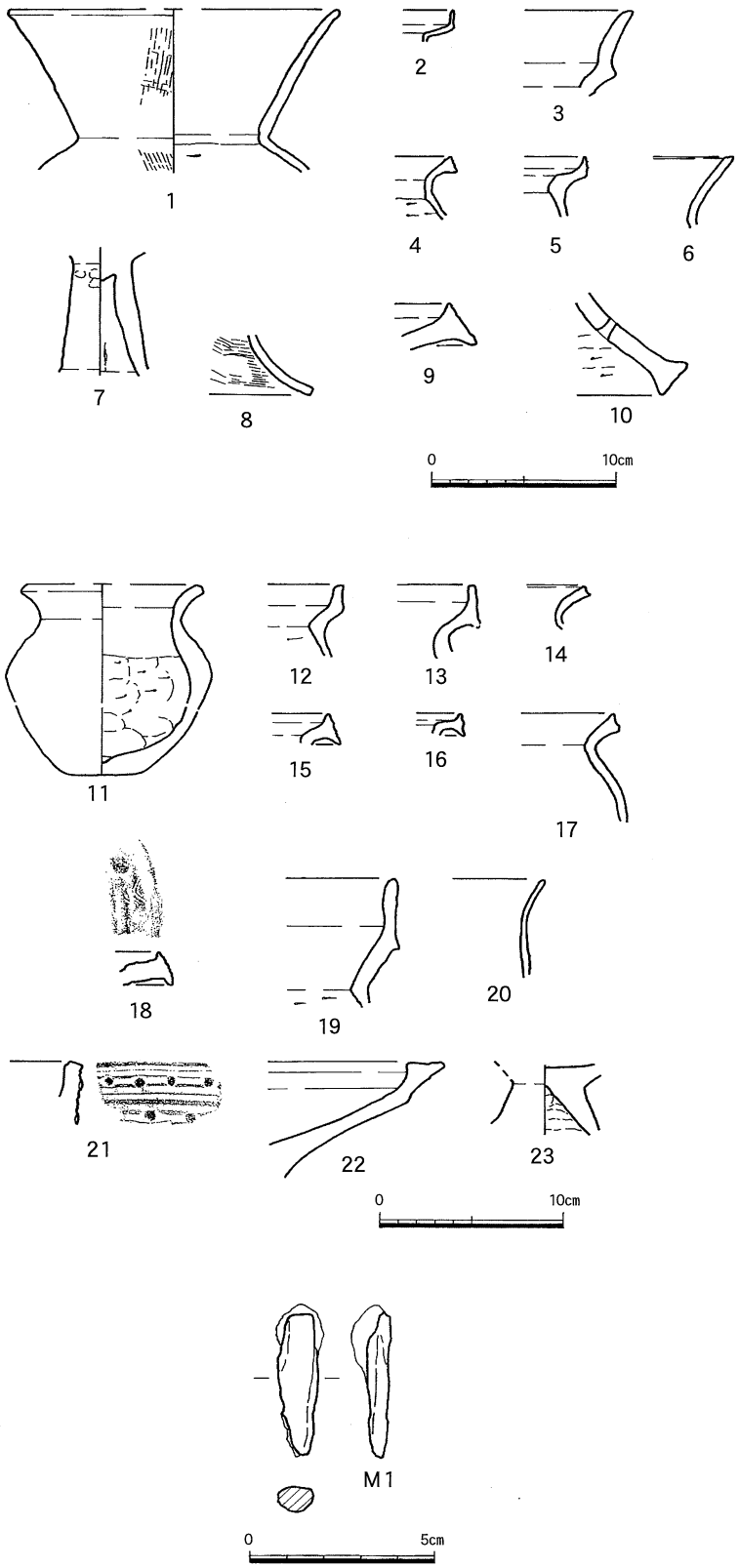
西隅部が調査区外のため平面形の全容は不詳であるが、やや不整な方形になるとみられる。規模は南北隅間の対角線で512cmを測る。検出面から床面まで34cmほどである。

床面には中央穴と１基の柱穴、不整な方形土壙、壁体溝を確認している。壁体溝は幅16cm、深さ8cmほどで、全周はせず南東辺の中間あたりで間をあけるような格好となっている。これは方形土壙の機能と何らかの関連をしていることによるものとみられる。南隅部の様子から、南西辺には壁体溝が巡らされていないようである。

遺物は土師器壺１をはじめ甕２・３・６、高杯７・８に加え、弥生土器も甕４・５、高杯９・10が混在して出土している。これは重複する竪穴住居２と遺物を



第６図　竪穴住居１・２（1/80）



第７図　竪穴住居１・２出土遺物(1/4･1/2)
(住１：１～10、住２：11～23・Ｍ１)

混在しあっていることによるものと考えられ、遺構の時期としては住居の形態とあわせ、出土した土師器の時期に相当する、と考えられる。

竪穴住居２(第５～７図、図版１・２・10)

竪穴住居１の北側に重複して位置する。西側は調査区外であり東側は現道のため平面形の全容は不明であるが、概ね円形の住居になるとみられる。規模については現存辺と中央穴との距離から直径760cmほどになると考えられる。検出面から床面まで20cmほどを測る。

床面においては７基の柱穴と中央穴、そして壁際で不整な方形土壙を検出し、壁体溝が巡っている。また数ヶ所にわたって被熱の痕跡が確認された。

遺物は壺11をはじめとし弥生後期を中心として出土している。壺11は口径(9.1)cm、底径3.5cm、器高10.4cmを測り、一種のミニチュア土器的な様態がうかがわれる。他には甕12～17、高杯22が出土している。壺18・21といった中期のものもみられる。甕19・20および高杯23は土師器である。なお、金属器として鉄器Ｍ１が出土しているが、器種・用途については不明である。

竪穴住居３（第５・８図、図版２）

Ｄ区西部に位置する。東側は後世の粘土採掘により掘削され、西側は調査区外のため全容は不明である。壁体溝の一部と３基の柱穴、１基の土壙を検出している。土壙は隅丸方形で南北長134cm、床面から底面まで32cmを測る。覆土には大小の礫が混じる。なお、壁体溝には２基のピットがみられる。

遺物としては甕の口縁部24、底部25のほか、石器として磨製石庖丁の刃部片と思われるＳ１が出土している。図示した遺物はいずれも土壙からの出土である。

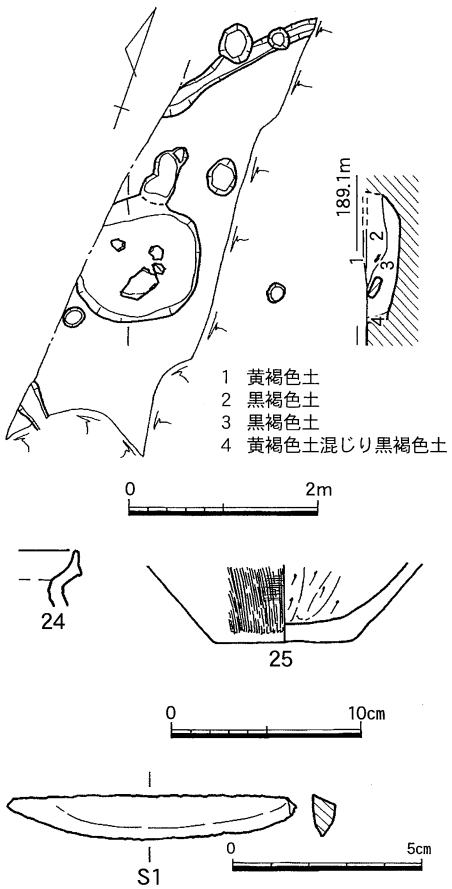
竪穴住居４（第５・９図、図版２）

Ａ区東側、調査区の最南端に位置する。西側部分は現道の造成時に削平されている。平面形は概ね胴張りの隅丸方形になるものとみられる。規模は中央穴をとおる南北間の軸で482cmを測る。検出面から床面までの深さは20cmほどである。床面には中央穴と６基の柱穴、壁体溝を確認している。柱穴は６基のうち３基が主柱穴になるとみられ、主柱穴の心々間の距離は220～240cmほどである。また壁体溝は幅16cm、深さ8cmほどで現存する限りにおいて全周している。なお、東隅部の壁体溝中にピット状の凹みが１基認められる。

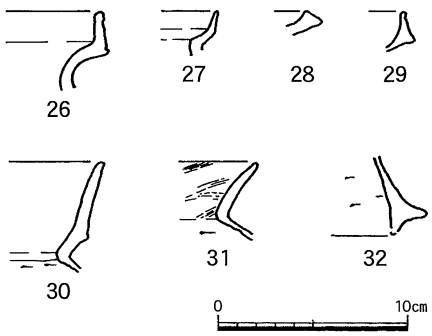
遺物は弥生土器として甕26・28・29、高杯32を、土師器では甕27・30・31が混在して出土している。

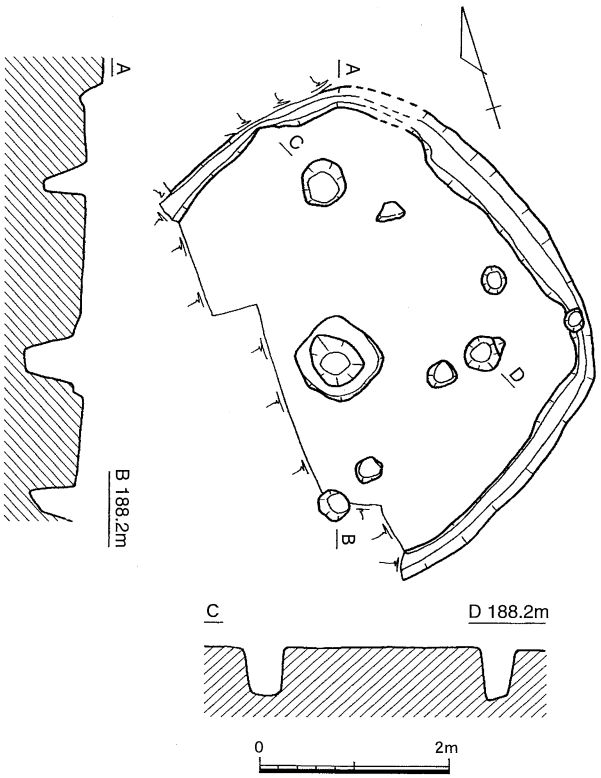
竪穴住居５（第５・10図、図版３）

竪穴住居４の北東に隣接して位置する。東側の大半は調査区外であり、西隅部はかつての粘土採掘により削られ失われてしまってお

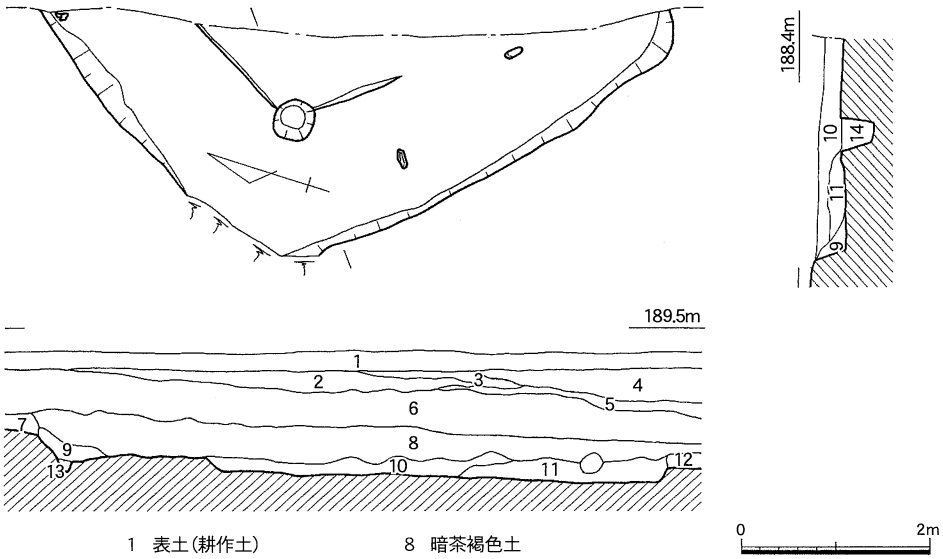


第８図　竪穴住居３（1/80）
出土遺物（1/4・1/2）

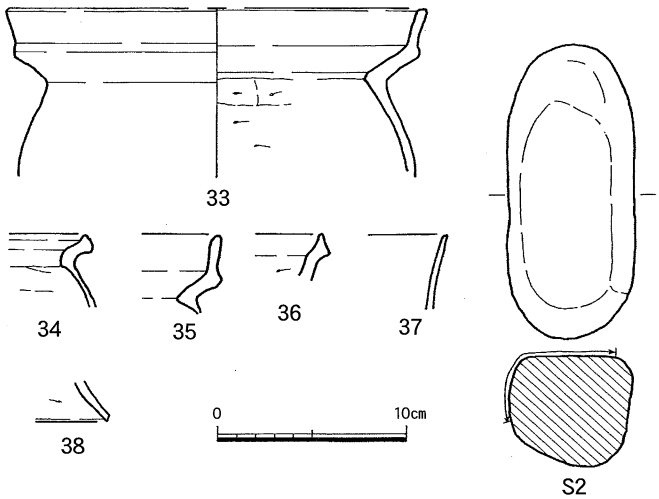




第９図　竪穴住居４（1/80）・出土遺物（1/4）



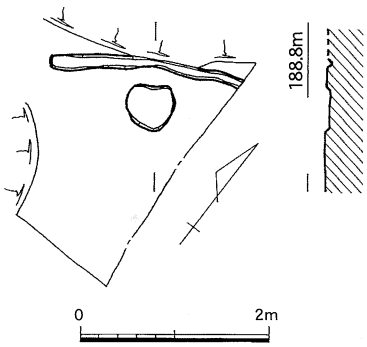
1 表土(耕作土)
2 明茶褐色土(床土)
3 茶褐色土(〃)
4 黄茶褐色土(〃)
5 明茶褐色土(〃)
6 茶褐色土
7 黄褐色粘質土
8 暗茶褐色土
9 灰茶褐色土
10 暗褐色粘質土
11 灰黄色土
12 灰黄色粘質土
13 灰褐色粘質土
14 黒褐色土



第10図　竪穴住居５(1/80)・出土遺物(1/4)

り全容は不明であるが、西辺の形状から概ね方形ないし長方形の住居になると思われる。検出面から床面まで40cmほどを測る。床面において柱穴を1基とベッド状遺構の一部を検出している。柱穴はベッド状遺構の隅に設けられている。なお壁体溝については確認していない。

遺物は土師器では鉢33をはじめ甕35・37、高杯38を、弥生土器では甕34・36を出土している。石器としては砥石Ｓ２が１点出土している。



第11図　竪穴住居６(1/80)

竪穴住居６(第５・11図、図版３)

Ｃ区東側に位置する。周囲を粘土採掘により掘削され、また後世の耕作による撹乱を被っていることから遺構の上部が失われており、床面に遺存する壁体溝の一部と浅い土壙１基が確認できるのみである。床面には調査区際においてわずかに被熱痕跡も認められる。この住居からは遺物が出土していないことから、時期の特定は困難である。

竪穴住居７(第５・12図、図版３)

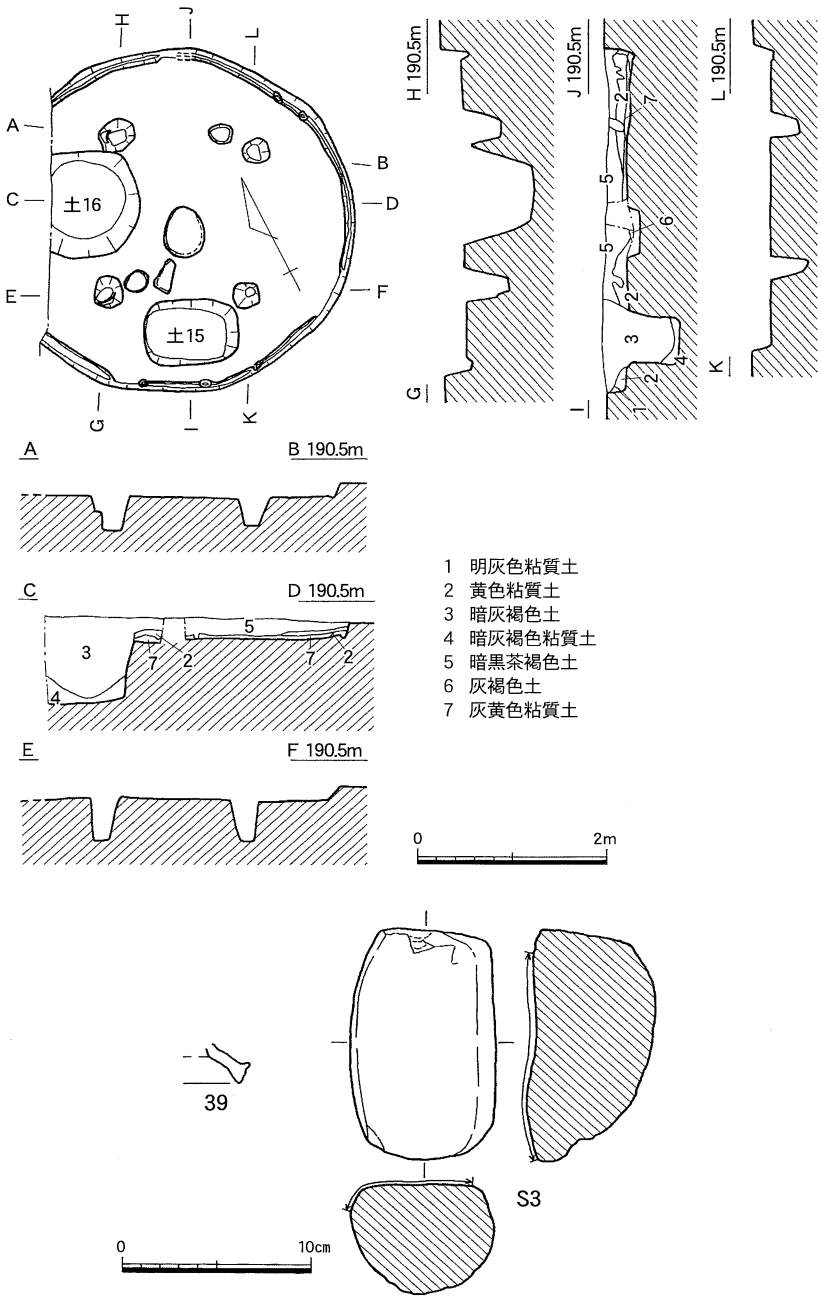
Ｋ区の南部に位置する。西側の一部が調査区外であるが、円形の竪穴住居である。規模は南北軸で直径370cmを測る。検出面から床面まで20cmほどである。柱穴は6基検出したが、主柱穴となるのは４基のようである。主柱穴の心々間距離は146～170cmを測る。中央土壙は不整円形でかつきわめて浅いものである。壁体溝は幅８～12cm、深さ４～12cmで、一部断続しながらもほぼ全周している模様である。また、北東および南西の位置に２ヶ所、40～60cmの間隔で２基の小ピットが認められることから、壁体溝に付属するなんらかの施設の痕跡を示している。貼り床については明瞭に認められる。なお、この住居の廃絶後に土壙15・16が設けられていることを確認している。

遺物は柱穴から出土している。若干の土器片が出土し、図示しえたのは高杯39のみである。石器として砥石Ｓ３が出土している。

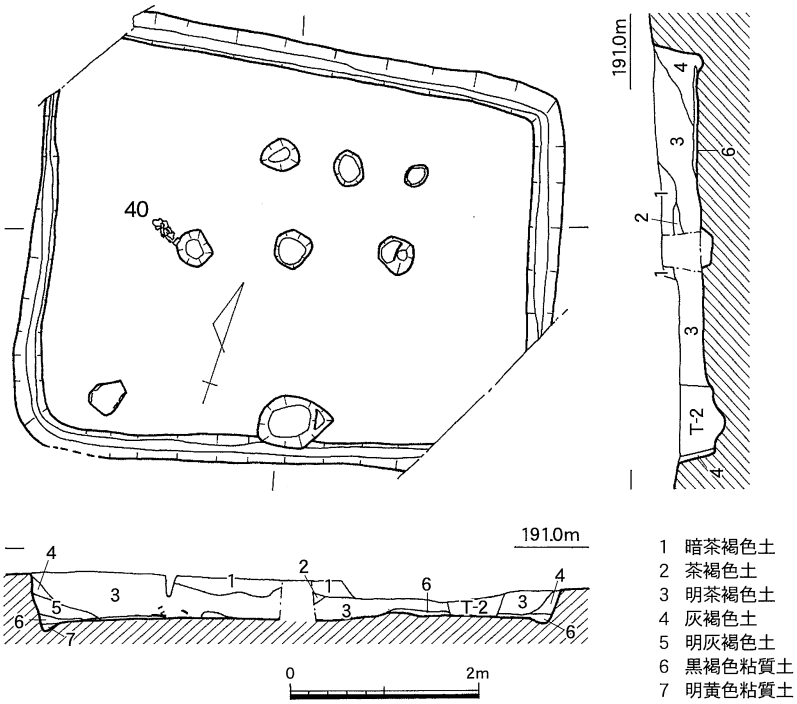
竪穴住居８(第５・13図、図版４・10)

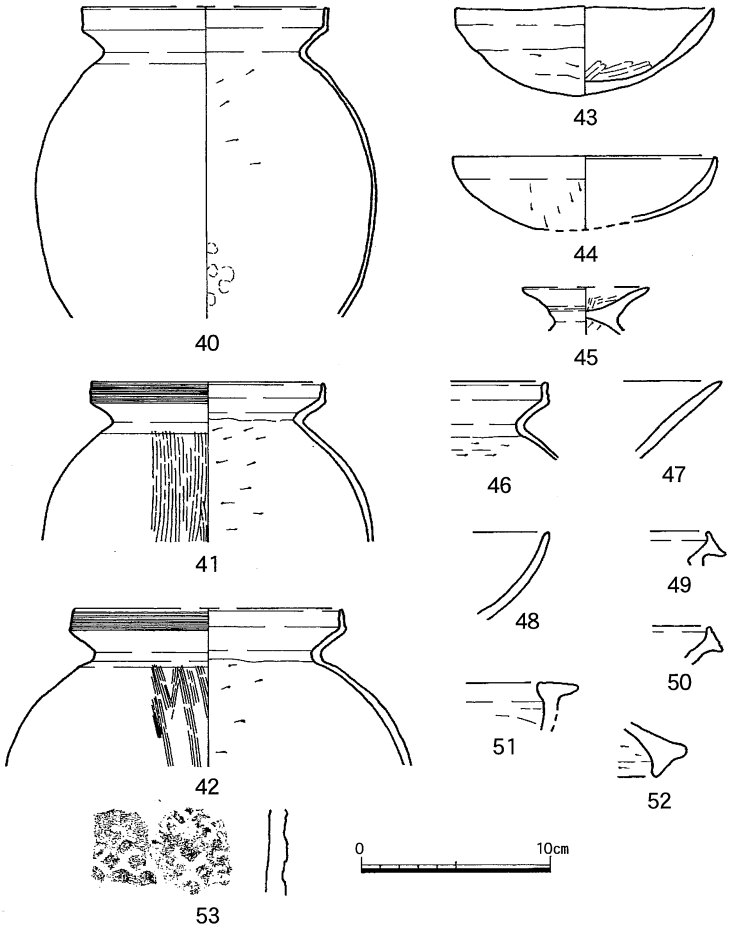
Ｍ区北部に位置する。東西の両隅部が調査区外のため不明である点を除き、概ね全容の把握できる住居である。平面形は不整な方形を呈する。規模は長軸560cm、短軸450cmを測り、検出面から床面まで50cmほどである。壁はほぼ直立している。壁体溝は幅12～20cm、深さ８cmで確認しうる限りにおいて全周している。柱穴については貼り床を除去後も精査をしたが明瞭ではなく、可能性のあるものとして６基を検出している。いずれも掘り方が浅く、実際には長軸方向の中央の３基が柱穴であったとみられる。南辺中央に楕円形に近い方形土壙がみられるが、柱穴と同様にかなり浅いものである。

遺物はいわゆる「吉備型甕」である土師器甕40～42を中心に鉢43・44、高杯、そして弥生土器と縄文早期の土器片も１点出土している。



第12図　竪穴住居７・土壙15・16(1/80)・竪穴住居７出土遺物(1/4)



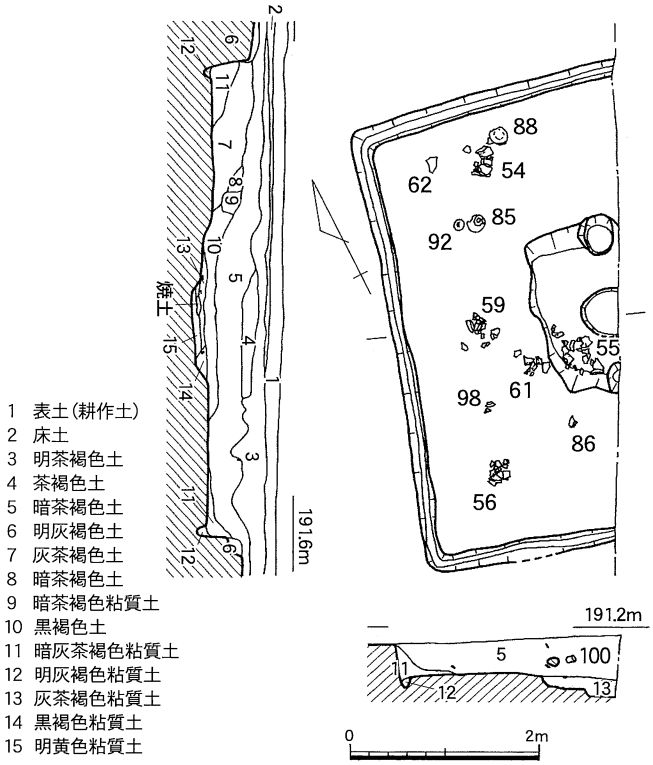


第13図　竪穴住居８（1/80）・出土遺物（1/4）

竪穴住居９(第５・14～16図、図版４～６・10・11)

Ｎ区とＯ区にまたがり位置する。東側が調査区外のため不詳であるが、やや不整形な方形の住居であると思われる。規模については西辺部で476cmを測る。検出面から床面まで36～40cmで、壁はほぼ直立する。壁体溝は幅12cm、深さ８～12cmで、検出したかぎりにおいて全周している。

床の中央が南北168cm、深さ14cmほどでやや方形に掘り込まれて凹んでおり、ベッド状遺構を形成している。床中央の凹みにはまた一段、径48cmほどの浅い掘り込みが認められる。その土層観察から焼土がみられることや周辺から出土した土器が二次的に被熱している点などから、炉であるとみられる。柱穴は調査区の際付近にて２基を確認している。



第14図　竪穴住居９(1/80)

遺物は今回調査した遺構のなかで最も多く出土している。床面およびその付近で出土したものとしては甕54～56・59・61・62、高杯85・86・88・92、鉢98等がある。器種別にみていくと、土師器では甕54～84、高杯85～97、鉢98、小型丸底壺99～101となり、102～105は弥生土器の甕である。完形の状態を復元できるものとしては甕54があり、完形で出土したものとしては高杯85、小型丸底壺100がある。

竪穴住居10(第５・17図、図版６)

竪穴住居９の西側に位置する。南東隅の一部を検出しているのみであるが、概ね直角を示していることから方形または長方形の住居であると想定される。後世の耕作等による撹乱を被っている。壁体溝が確認でき、幅16cm、深さ８cmを測る。

遺物については土器片が少量出土しているが、図示できるものはない。

竪穴住居11(第5・18図、図版６)

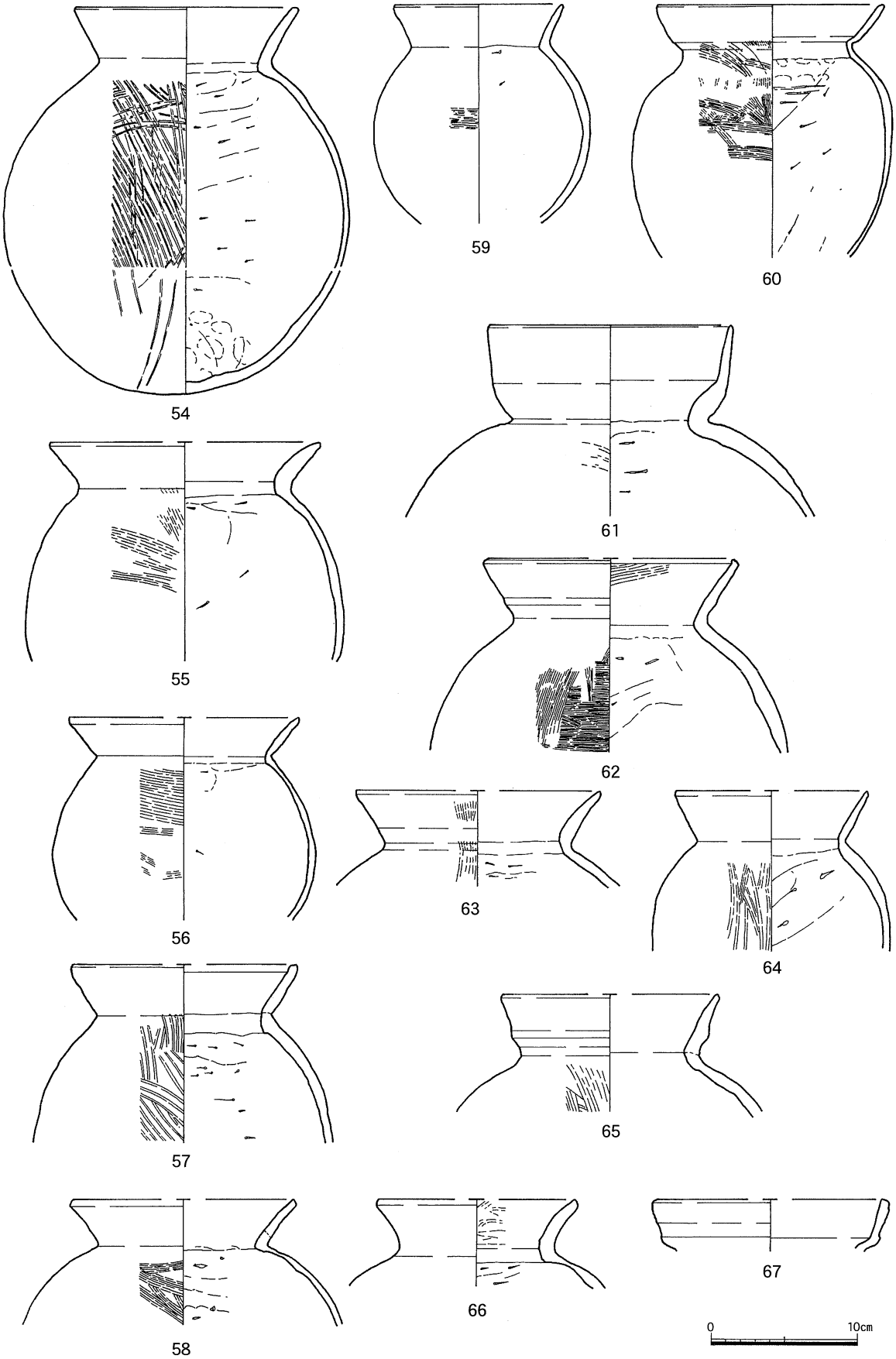
Ｏ区中央の西寄りに位置する。西側部が調査区外のため全容は不明だが、径300cmの概ね不整な円形の住居になるとみられる。検出面から床面まで24cmほどを測る。壁体溝は有さず、柱穴についても明瞭なものは検出できていない。

遺物については弥生土器の鉢106、高杯107、壺108などを出土している。

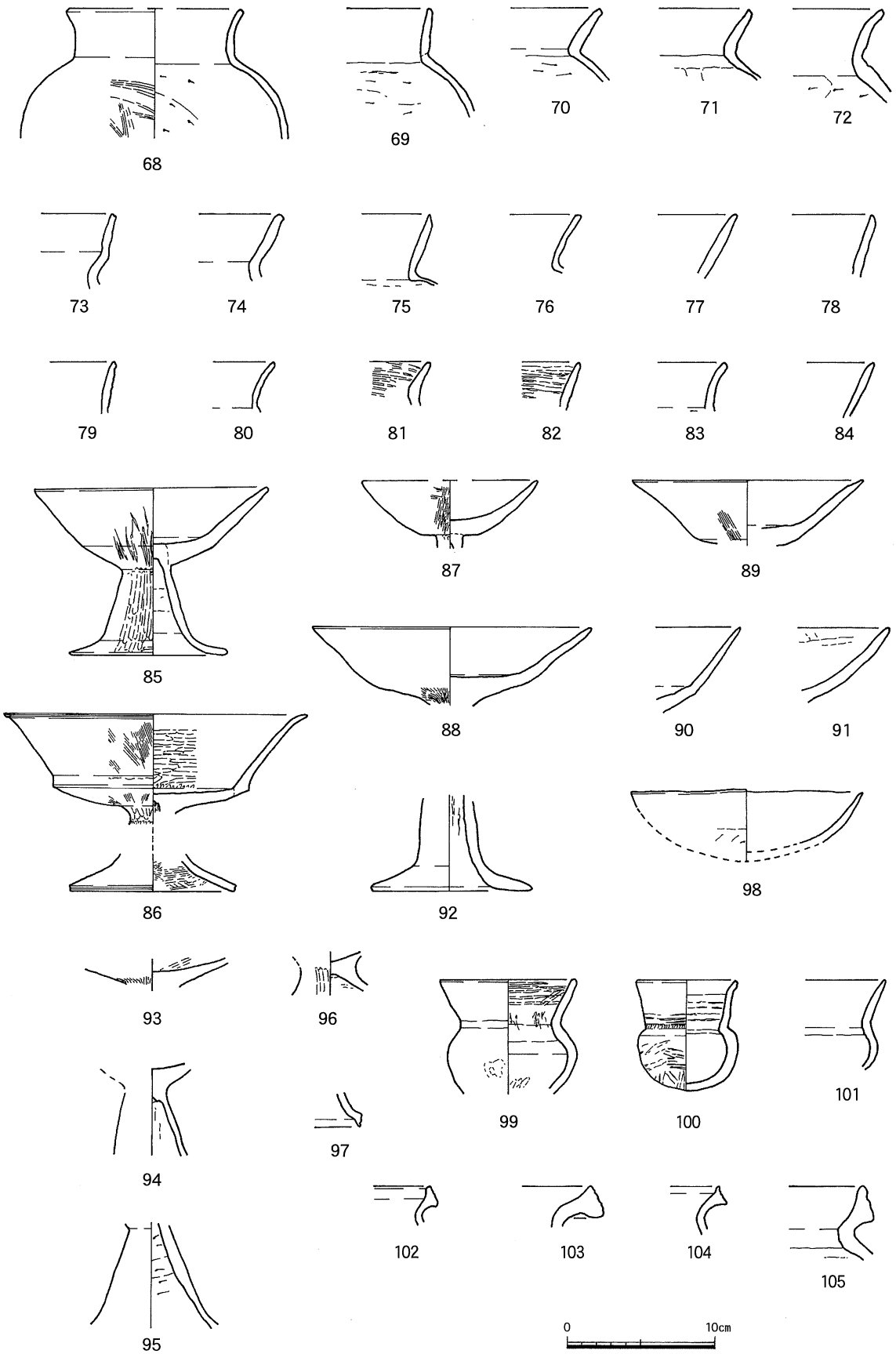
竪穴住居12(第５・19図、図版７)

Ｐ区の東寄りに位置する。竪穴住居12～15まではそれぞれ重複した状況で検出している。

地表からの堆積が薄くすでに削平されている模様であり、壁体溝の一部および柱穴を確認したのみである。遺物は少量の土器が柱穴から出土している。



第15図　竪穴住居９出土遺物①(1/4)

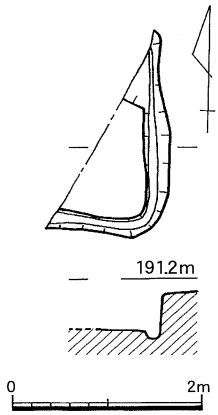


第16図　竪穴住居９出土遺物②(1/4)

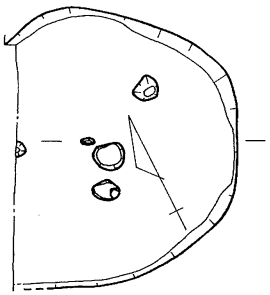
竪穴住居13(第５・20図、図版７)

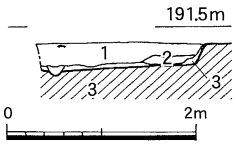
Ｐ区の北半部に位置する。竪穴住居12・14と重複している。層位的には確認することが不可能であったが、検出状況から竪穴住居12→13→14の順序で構築されたものとみられる。

一部が調査区外であることと後世の撹乱により全容は不明であるが、北西隅の形態から平面形が隅丸方形を呈する住居であると思われる。また覆土中に多くの炭化材および焼土塊が認められたことから、焼失住居であることがわかる。検出面から床面まで44cmを測る。壁は斜め気味に掘り込まれている。焼土塊については床面付近としては

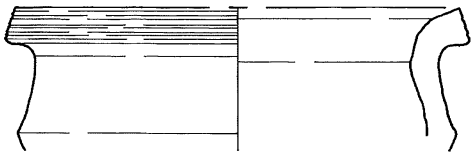


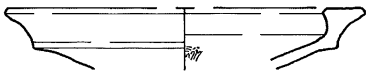
第17図　竪穴住居10(1/80)

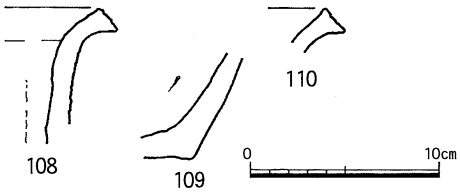




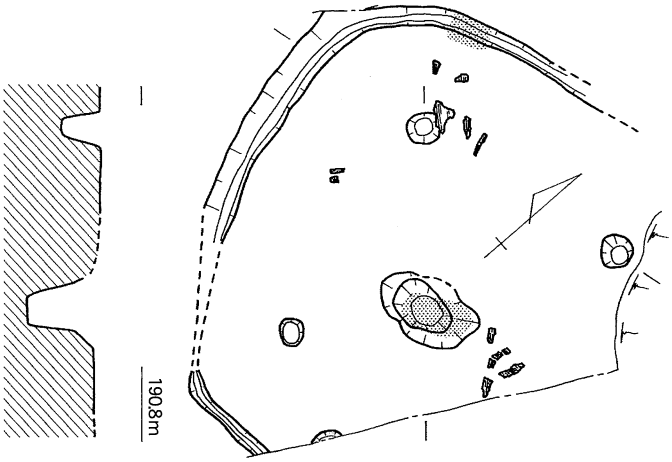
1　黒褐色土
2　灰褐色土
3　明黄色粘質土

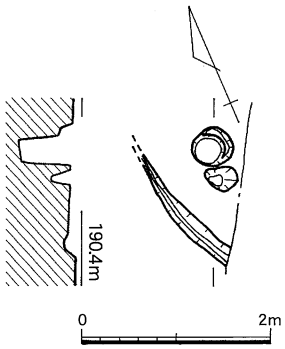




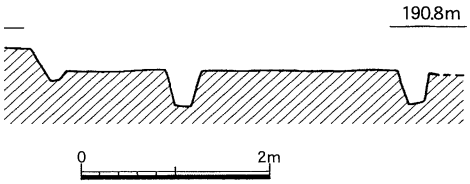


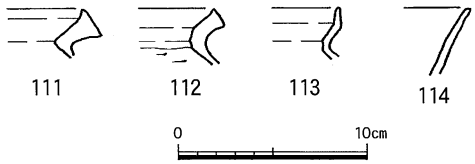
第18図　竪穴住居11(1/80)・出土遺物(1/4)



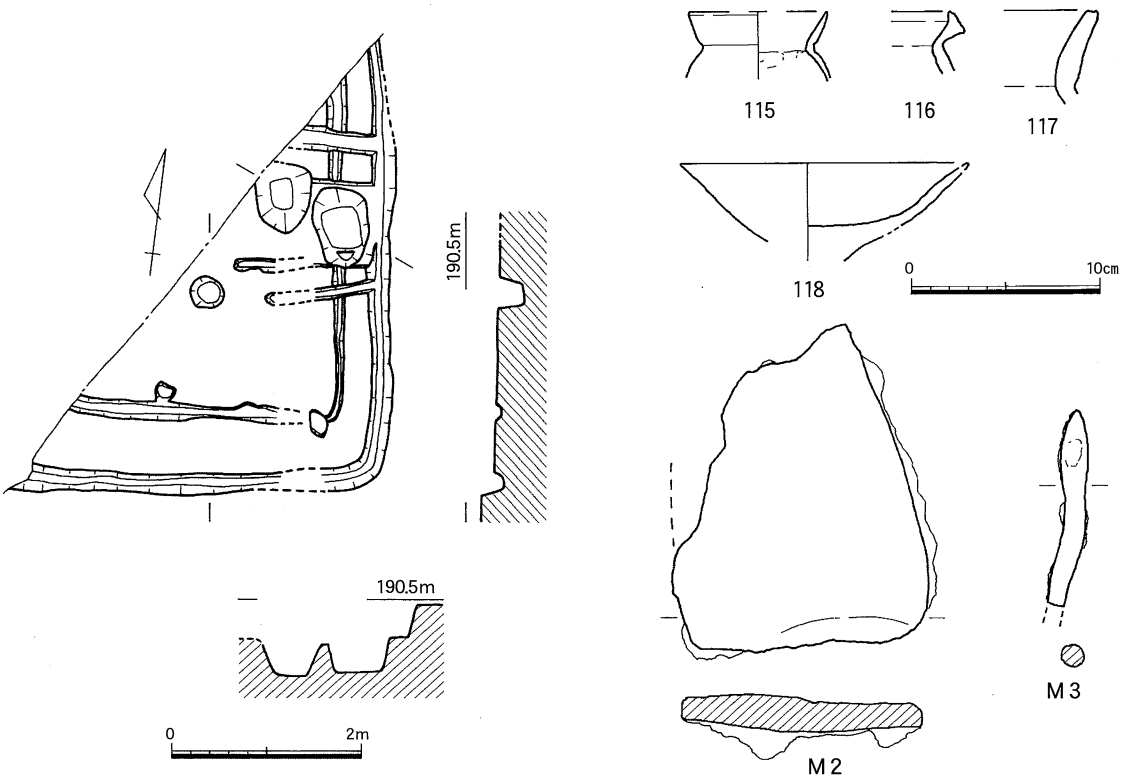


第19図　竪穴住居12(1/80)

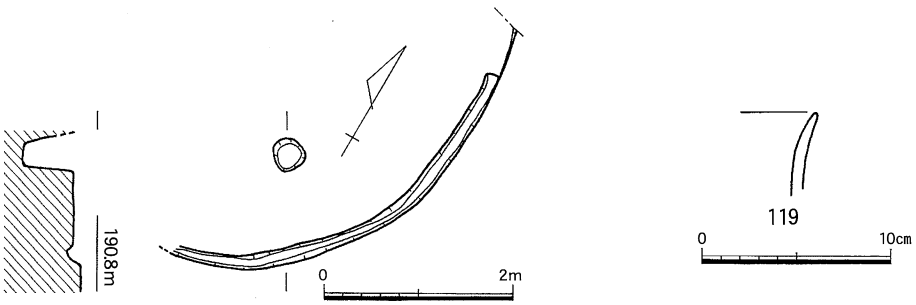




第20図　竪穴住居13(1/80)・出土遺物(1/4)



第21図　竪穴住居14(1/80)・出土遺物(1/4・1/2)



第22図　竪穴住居15(1/80)・出土遺物(1/4)

中央穴および北辺の壁体溝を覆う状態で確認している。

焼失住居でありながらも遺物については僅少であり、弥生土器甕111・112、土師器113・114のほか中央穴から土師器の胴部片を出土している。

竪穴住居14(第５・21図、図版７・11)

Q区に位置する。北側部分が調査区外ではあるが、方形ないし長方形を呈する住居になるとみられる。また今回検出した住居のうちで唯一、建て替えもしくは拡張の形跡がうかがわれるものである。拡張部の南辺において、検出面から床面まで12cmほどを測る。竪穴住居13・15とそれぞれ重複しているが、３軒のうち最も新しいものである。

東壁際に方形土壙が２基みられ、それぞれが拡張に伴う新・旧であると思われる。なお、２基の方形土壙は重複していない。新・旧ともに壁体溝がみられ、拡張部側で幅20cm、深さ12cmほどである。

また、拡張部の壁体溝から住居内側に向けて、確認しうる限りではあるが長さ120～140cm、幅12cm～24cmほどの4本の溝を設けている。なお、柱穴については1基のみ確認している。

遺物は115～118の弥生土器および土師器、そして鉄器Ｍ２・３が出土している。高杯118は杯部のみが、床面よりわずかに上位で伏せた状態で出土した。器質はかなり脆弱であり二次的に被熱しているとみられるが、周辺で焼土や炭化物等については特に検出していない。鉄器Ｍ２・３についてはそれぞれの形状からＭ２は鉄斧、Ｍ３は鉄鏃の茎である可能性が考えられる。

竪穴住居15(第５・22図、図版８)

調査区の最北端に位置する遺構である。竪穴住居14と重複しているが、竪穴住居14に先行するとみられる。平面の大部分が調査区外であるが、検出した輪郭から概ね円形の住居であると思われる。床面において、壁体溝の一部と柱穴を１基確認している。壁体溝は幅16cm、深さ８cmを測る。

遺物については図示した119のほか土器小片しか出土していない。そのため住居の時期を特定する確証に欠けるが、平面が円形になると想定されることから弥生後期であるとみられる。

２　土壙

土壙１(第５・23図)

Ｂ区西側の中間あたりに位置し、竪穴住居１の南側にある。長さ150cm、幅130cm、深さ８cmを測る、不整な方形の土壙である。東側の長辺と西側の短辺にそれぞれ張り出しを有する。遺物を出土していないため時期等については不明である。

土壙２(第５・23図)

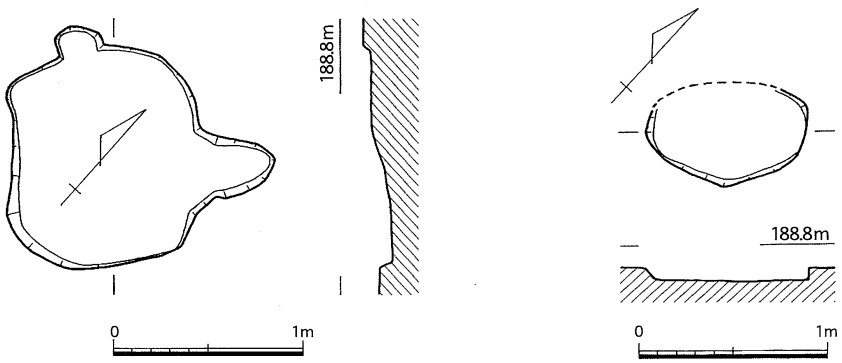
竪穴住居１の東辺と切り合う形で検出した。長さ84cm、幅(50)cm、深さ6cmを測る、不整な楕円形の土壙である。遺物を出土していないため時期等については不明である。

土壙３(第５・24図)

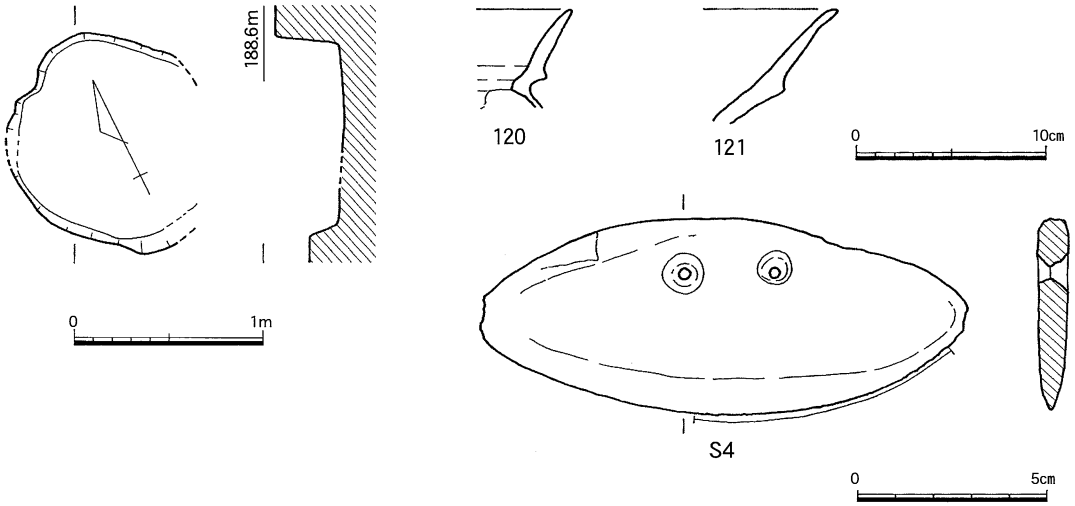
竪穴住居１の北辺および竪穴住居２の床面と切り合う状態で位置する。長さ(80)cm、幅107cm、深さ34cmを測る、不整な方形の土壙である。遺物としては土師器甕120、高杯121および磨製石庖丁Ｓ４が出土している。

土壙４(第５・25図)

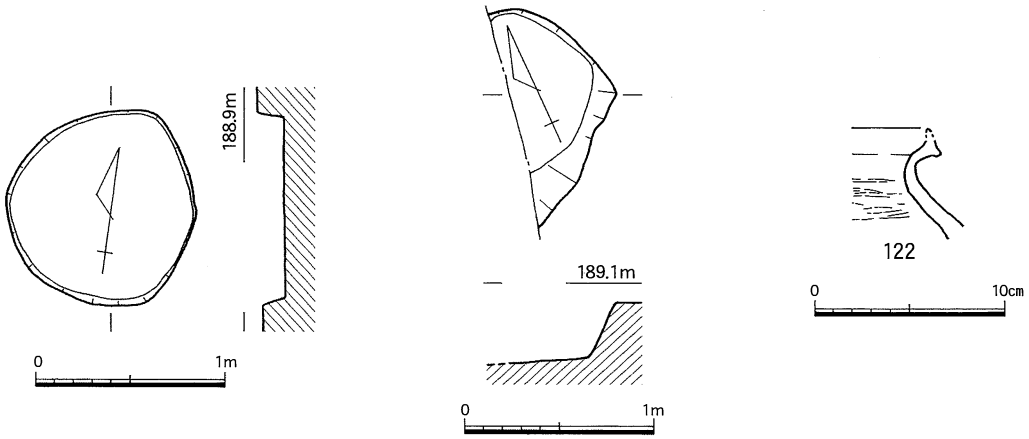
竪穴住居２の北側に位置する。長さ108cm、幅102cm、深さ14cmを測る、不整な円形の土壙である。図示できる遺物を出土していないが、隣接する竪穴住居２と時期をほぼ同じくするとみられる。



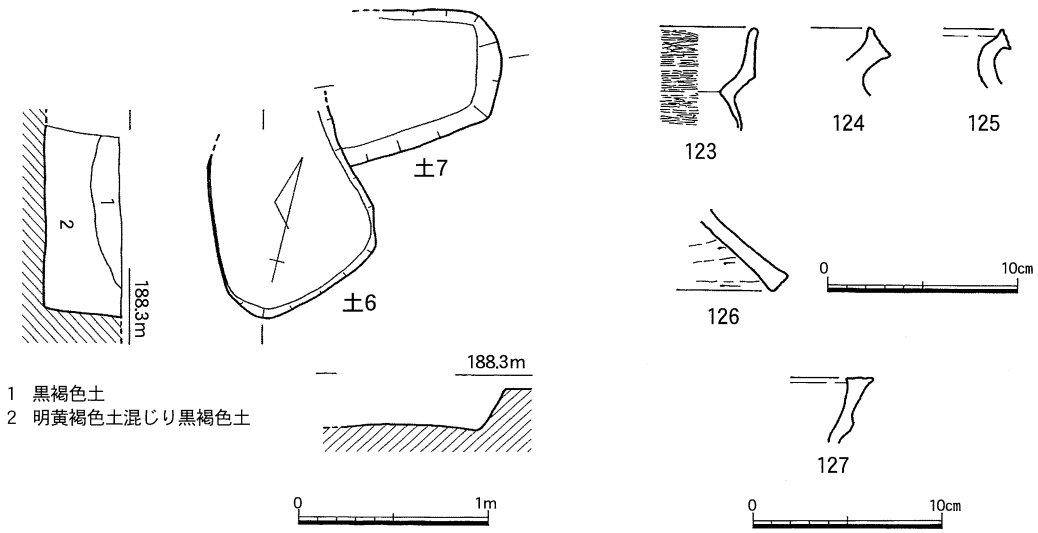
第23図　土壙１・２(1/40)



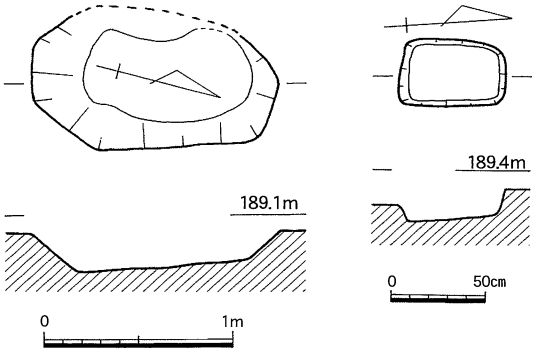
第24図　土壙３（1/40）・出土遺物（1/4・1/2）



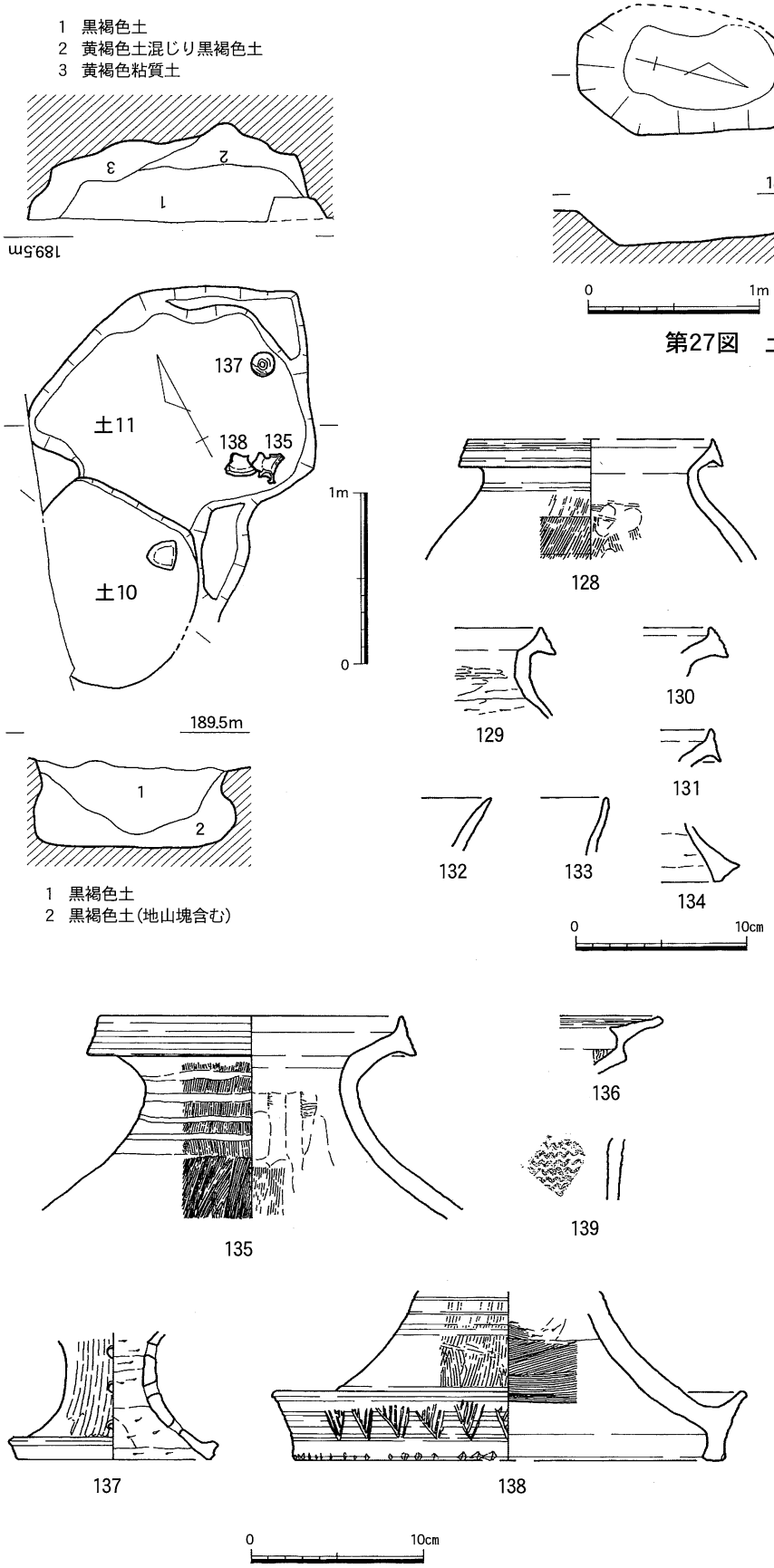
第25図　土壙４・５（1/40）・土壙５出土遺物（1/4）



第26図　土壙６・７（1/40）・出土遺物（1/4）
（土６：123～126、土７：127）



第27図　土壙８・９（1/40）



第28図　土壙10・11（1/40）・出土遺物（1/4）
（土10：128～134、土11：135～139）

土壙５（第５・25図、図版２）

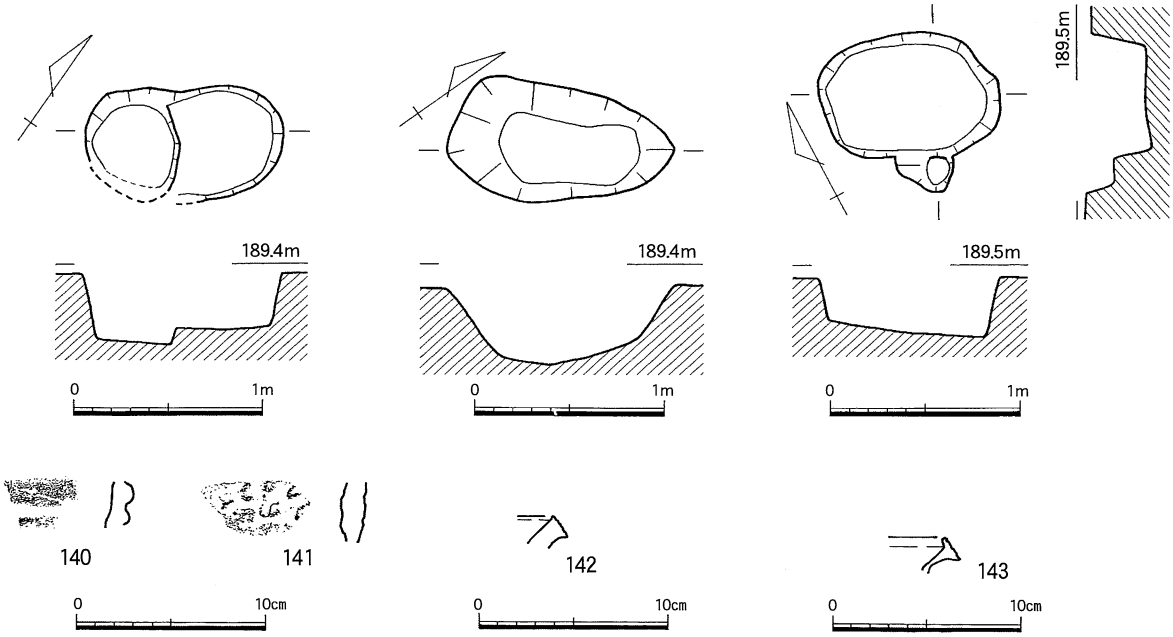
竪穴住居３の北側に位置する。西側が調査区外のため平面形については不明である。長さ(118)cm、幅(56)cm、深さ30cmを測る。弥生土器甕122を出土している。

土壙６（第５・26図、図版２）

竪穴住居4および土壙７と重複する。北側は後世の粘土採掘により失われている。長さ(80)cm、幅85cm、深さ42cmを測る不整な隅丸の長方形土壙である。直立気味に比較的深く掘られている。遺物では土師器123、弥生土器124～126を出土している。

土壙７（第５・26図、図版２）

土壙６と重複する。土壙６と同様、西側は後世の粘土採掘により失われている。長さ(92)cm、幅77cm、深さ42cmを測る、不整な長方形土壙である。遺物は弥生土器壺127を

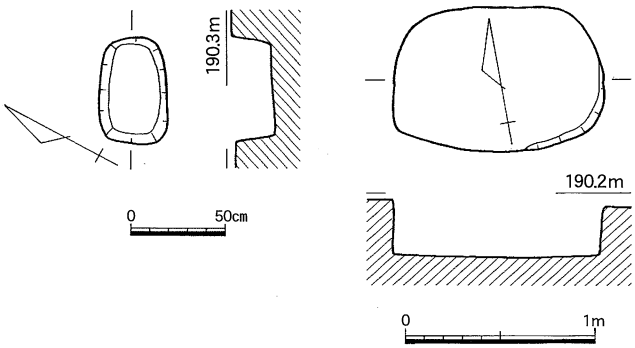


第29図　土壙12・13・14(1/40)・出土遺物(1/4)

出土している。

土壙8(第5・27図)

E区の北端に位置する。長さ130cm、幅(57)cm、深さ20cmを測る。表土の堆積が薄い場所にあるため、後世の耕作による撹乱を受けている。遺物を出土していないため、時期等については不明である。



第30図　土壙17・18(1/40)

土壙9(第5・27図)

F区の西端部に位置する小規模な土壙である。長さ56cm、幅36cm、深さ14cmを測る。遺物を出土していないため時期等については不明である。

土壙10(第5・28図、図版8)

F区の西端部、土壙9と土壙12の間に位置する。土壙11と重複している。西側の一部が調査区外長さ(108)cm、幅(107)cm、深さ50cmを測る、やや丸みを帯びた方形の土壙である。断面は袋状を呈しており、貯蔵穴であったと考えられる。遺物は甕128をはじめとする土器を出土している。

土壙11(第5・28図、図版8・11)

土壙10と重複して位置する。今回の調査で検出した土壙のなかでは最大規模で長さ(166)cm、幅123cm、深さ58cmを測る、不整な方形の土壙である。

遺物は覆土中に浮遊した状態で出土している。弥生土器壺135や器台138といった祭祀性のうかがわれる遺物がみられる。なお、縄文土器139も出土しているが、埋土に混入したものとみられる。

土壙12(第５・29図)

土壙11の北東に隣接して位置する。長さ106cm、幅60cm、深さ36cmを測る楕円形の土壙である。遺物としては縄文土器**140・141**を出土しているが、他に縄文時代の明確な遺構がないことから、埋没の過程で埋土に混入したものとみられる。

土壙13(第５・29図)

Ｇ区南側の西寄りに位置する。平面は不整な長楕円形であり、長さ120cm、幅65cm、深さ40cmを測る。弥生土器甕**142**等少量の遺物を出土している。

土壙14(第５・29図)

Ｇ区南端部の東寄りに位置する。長さ96cm、幅85cm、深さ32cmを測る、平面が楕円形の土壙である。遺物は弥生土器甕**143**等少量の遺物を出土している。

土壙15(第５・12図、図版９)

竪穴住居7の床面上南西方向に位置する。住居の埋没後に設けられていることを土層断面により確認している。平面は隅丸の長方形で、長さ100cm、幅68cm、検出面からの深さ82cmを測る。底面付近が若干袋状を呈することから、貯蔵穴的な機能を有しているとみられる。遺物は出土していない。

土壙16(第５・12図、図版９)

竪穴住居７の床面上北西方向に位置する。平面は円形で、長さ112cm、幅(94)cm、検出面からの深さ92cmを測る。土壙15と同時期に同様の役割を担っていたものとみられる。遺物は出土していない。

土壙17(第５・30図)

竪穴住居7の東付近に位置する。長軸57cm、短軸35cm、深さ20cmを測り、隅丸長方形を呈する小型の土壙である。遺物は出土していない。

土壙18(第５・30図、図版９)

竪穴住居９の北側そばに位置する。東西方向に長軸、南北方向に短軸を有する。長軸110cm、短軸77cm、深さ30cmを測る、不整な楕円形の土壙である。ほぼ垂直に掘り込まれており、底面は概ね水平をなしている。

遺物は出土していないが、検出時の様子から竪穴住居９と時期を同じくするものと考えられる。

３　遺構に伴わない遺物

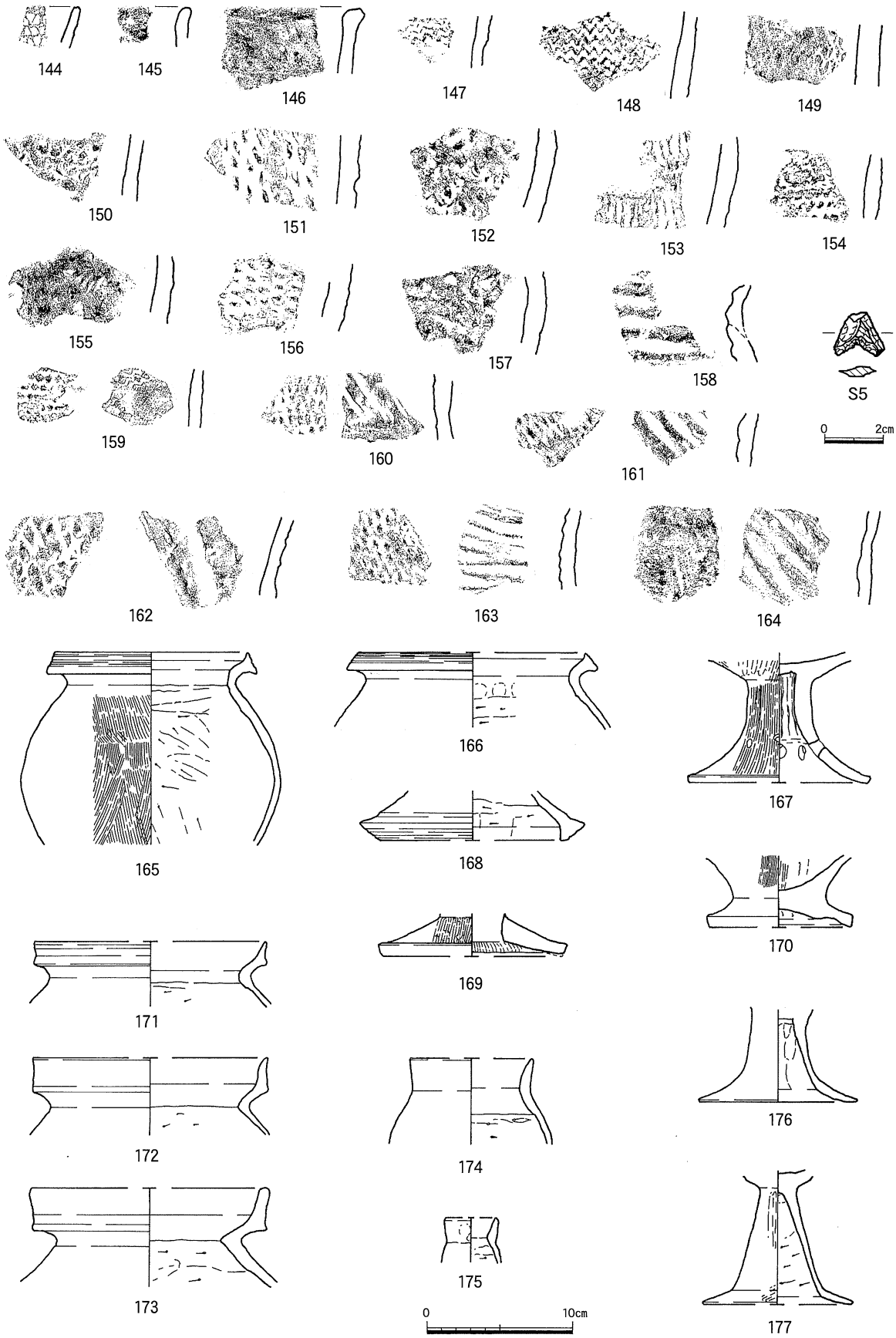
遺構に伴わない遺物(第31図、図版12)

第31図には包含層等から出土した、遺構に伴わない遺物を掲載する。なお、確認調査時にトレンチより出土した遺物で、調査後に遺構からの出土であることを確認できたもの以外についてもここに含めた。

144～164は縄文土器片で、**144～146**の口縁部片３点を除いてはほとんどが胴部等の破片である。施文については各種の押型文がみられることから、縄文時代早期に該当する。石器としては石鏃Ｓ５が出土している。時期としてはこれら縄文早期の土器に伴うものとみられる。

弥生土器については**165～170**に示している。甕**165・166**、高杯**167・168**がある。なお、**169**は器台、**170**は台付鉢になるものと思われる。いずれも後期から終末にかけてのものである。

171～177は土師器である。甕**171～173**、鉢になるとみられる**174・175**、高杯**176・177**である。**175**は手捏ねにより整形されたミニチュア土器である。



第31図　包含層等出土遺物(1/4・1/2)

第４章　まとめ

今回の大旦遺跡の発掘調査は小規模な道路建設に伴うものであったことから、その調査範囲が長いけれども狭い、という制約のもとに実施せざるを得ないものであった。そのため主要な遺構である竪穴住居についても全容を検出できたものは１軒もなく、また出土遺物、特に土器に関しても床面からの出土等といった、遺構との同時性を確実に把握できる資料もきわめて限定されている。

上述の理由から不十分ではあるが、遺構・遺物について若干の検討について以下に述べる。

縄文時代の遺構・遺物

縄文時代については、主として包含層から早期の押型文土器が出土している。小破片ばかりでありある程度の器形を復元できるような個体もない。一部の土壙から縄文土器が出土しているが、埋土に混入したものか、または形成されている縄文期の包含層に後世の遺構が設けられ、その際に底面付近に遺存したもの、等といった理由が考えられる。

なお、**竪穴住居**11については縄文時代の遺物こそ出土していないが、その住居形態等からは十分に縄文早期の住居に想定していた遺構である。しかしながら覆土からの出土遺物が弥生後期の土器しかみられず、縄文早期の住居である可能性については保留せざるをえない。

弥生時代の遺構・遺物

弥生時代の遺構としては、竪穴住居では平面が円形を呈する**竪穴住居**２・７および出土遺物から**竪穴住居**３が、**土壙**では５・10・11が現在のところ確実に比定できる。**竪穴住居**２は推定される規模が直径で約760cmと比較的大きく、中央穴および方形土壙ともに認められる。出土している土器から後期前半に比定できる。

同じ円形住居である**竪穴住居**７は直径370cmと小型であり対照的である。明確な遺物がなく、時期の比定は困難である。

胴張り形状の**竪穴住居**４・13については弥生土器と土師器を混在して出土しているが、弥生時代末期から古墳時代への過渡期にあたるものと考えられる。

土壙では10・11が明確な遺物を出土している。甕128・壺135・高杯137・器台138の特徴から概ねＶ－３・４様式[(1)]に比定することができる。

このように、弥生時代の遺構については良好な遺物を伴うものが限られており、厳密な時期の特定は困難であるが、Ｖ期を通じて営まれていたと考えられる。

古墳時代の遺構・遺物

古墳時代前期の遺構としては方形を呈する**竪穴住居**１・５・８・９・14が確実に比定できる。**土壙**については出土遺物から３のみが確実に比定できるものと考えられる。

竪穴住居は基本的に壁体溝を有しており、**竪穴住居**８・９・14については検出した限りにおいて間断なく連続して設けられている。唯一**竪穴住居**５のみ壁体溝を有していない。

ベッド状遺構については**竪穴住居**５・９でのみ確認している。**竪穴住居**５は柱穴を支点にＬ字型に一部を高めるようなつくりとなっているようであり、**竪穴住居**９は中央の一部の小範囲を方形に掘り凹めて設けていると考えられる。

この大旦遺跡でも古墳時代の住居については柱穴が少なく不明瞭なものが多い。特に**竪穴住居８**についてはその検出にあたり大変難渋したほどである。古墳時代に移行してからは柱穴の少数化とともに住居の掘り方が概ね深くなっていることからも、上屋構造の変化にともなう居住空間の確保といったことが、今回の調査結果からもある程度追認することができる。(2)

次に出土遺物についてみていくこととする。土師器についてはいわゆる床面直上での出土として確認できたのは、**竪穴住居８・９**のみである。**竪穴住居８**では吉備型甕40～42が鉢を伴って一括出土している。完形品がないことから確実性には欠けるが、甕の頸部から肩部にかけての微妙な凹みの作り出しや鉢の口縁部直下が肥厚する断面形状といった特徴からⅠ－４期(3)に比定できる。

最も多く遺物を出土しているのは**竪穴住居９**である。甕については複合口縁を有するものはみられず、いわゆる「く」の字状口縁のものを主体としている。62・65といった一部には口縁部外面を凸帯状に整形しているものもある。また小型丸底壺99・100の特徴等から、概ね「Ⅱ－1期に相当するとみられる。しかしながら、高杯85の杯部などにはⅠ－５期の様相もうかがわれ、一部の器種は過渡期にあるものとみられる。

この真庭市を含め美作地域においても、古墳時代前期の遺構・遺物の検出例はあまり例がなく(4)、本調査で得られた資料は今後も当市の当該時期を考えていく上で重要な位置を占めていくこととなると思われる。

註

(１)弥生土器の時期比定については、次の文献を参照した。

正岡睦夫「備前地域」『弥生土器の様式と編年－山陽・山陰編－』木耳社　1992

(２)古墳時代の竪穴住居に関しては、次の文献を主に参考とした。

亀山行雄「古墳時代の竪穴住居」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』104　岡山県教育委員会　1996

(３)土師器の編年については、次の文献に準拠している。

平井泰男他「土師器」『吉備の考古学的研究』(下)　山陽新聞社　1992

また、下記の文献も参考とした。

柳瀬昭彦他「川入・上東」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16　岡山県教育委員会　1975

高橋　護「中国・四国」『古墳時代の研究６　土師器・須恵器』　雄山閣出版　1998

亀山行雄「吉備地域の古式土師器」『古式土師器の年代学』 財団法人大阪府文化財センター　2006

(４)美作地域での他の例としては、美作市の鎌倉山遺跡などがあげられる。

松本和男「鎌倉山遺跡」『美作町史』資料編Ⅰ　美作市・美作町史編纂委員会　2006

柴田英樹他「宮ノ上遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』197　岡山県教育委員会　2006

中山俊紀他「大田十二社遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第10集　津山市教育委員会　1981

遺物観察表　凡例

土器

・「計測値」のうち、口径と底径の「()」は復元値、器高の「()」は残存値を示す。なお、一定の部位(口縁部・底部等)のみの小破片については計測を略した。

・残存状況は、復元も含めて全体が残るものは「完形」、「ほぼ完形」と表した。

・色調については新版標準土色帳を参照した。

・胎土については、含まれる砂礫の粒径が２㎜以上のものを礫、１～２㎜のものを粗砂、１㎜以下のものを細砂として表した。

石器・金属器

・「計測値」のうち、「()」は残存値を示す。「重量」は現状の最大値を示す。

土器

掲載番号	出土場所	種別	器種	計測値(cm)			外面色調	胎土	焼成	特徴・備考
				口径	底径	器高				
1	竪穴住居1	土師器	壺	(17.8)		(8.9)	明赤褐色	細砂	不良	二次焼成か
2	竪穴住居1	土師器	甕				明灰色	精良	良好	
3	竪穴住居1	土師器	甕				明白橙色	粗砂	良好	内外面に丹の痕跡
4	竪穴住居1	弥生土器	甕				明灰褐色	細砂	良好	
5	竪穴住居1	弥生土器	甕				橙色	粗砂	良好	
6	竪穴住居1	土師器	甕				明白灰色	粗砂	良好	
7	竪穴住居1	土師器	高杯			(7.1)	黄茶褐色	礫・細砂	良好	
8	竪穴住居1	土師器	高杯				灰白色	精良	良好	
9	竪穴住居1	弥生土器	高杯				橙色	細砂	良好	
10	竪穴住居1	弥生土器	高杯				にぶい橙色	細砂	やや不良	
11	竪穴住居2	弥生土器	壺	(9.1)	3.5	10.4	明灰白色	粗砂	良好	ほぼ完形
12	竪穴住居2	弥生土器	甕				にぶい褐色	細砂	やや不良	
13	竪穴住居2	弥生土器	甕				橙色	細砂	良好	
14	竪穴住居2	弥生土器	甕				褐灰色	精良	良好	外面に煤付着
15	竪穴住居2	弥生土器	甕				淡橙色	礫	良好	
16	竪穴住居2	弥生土器	甕				明褐灰色	細砂	良好	
17	竪穴住居2	弥生土器	甕				灰色	細砂	不良	
18	竪穴住居2	弥生土器	壺				にぶい橙色	細砂	良好	口縁内面に櫛描波状文、円形貼付文
19	竪穴住居2	土師器	甕				浅黄橙色	精良	良好	内外面に丹
20	竪穴住居2	土師器	甕				黄橙色	粗砂	やや不良	
21	竪穴住居2	弥生土器	壺				にぶい橙色	精良	良好	外面に擬凹線文、円形貼付文
22	竪穴住居2	弥生土器	高杯				橙色	細砂	やや不良	
23	竪穴住居2	土師器	高杯				浅黄橙色	細砂	やや不良	外面に丹の痕跡
24	竪穴住居3	弥生土器	甕				橙色	粗砂・細砂	良好	
25	竪穴住居3	弥生土器	甕		7.2		灰黄褐色	粗砂	良好	外面に黒斑あり
26	竪穴住居4	弥生土器	甕				浅黄橙色	細砂	良好	
27	竪穴住居4	土師器	甕				灰白色	細砂	良好	
28	竪穴住居4	弥生土器	甕				にぶい橙色	粗砂	良好	
29	竪穴住居4	弥生土器	甕				にぶい褐色	粗砂	良好	
30	竪穴住居4	土師器	甕				にぶい褐色	細砂	良好	
31	竪穴住居4	土師器	甕				にぶい褐色	精良	良好	
32	竪穴住居4	弥生土器	高杯				黄橙色	細砂	やや不良	
33	竪穴住居5	土師器	甕	(22.0)		(8.9)	灰白色	礫・粗砂	良好	内外面に丹
34	竪穴住居5	弥生土器	甕				浅黄橙色	細砂	良好	
35	竪穴住居5	土師器	甕				灰褐色	細砂・粗砂	良好	
36	竪穴住居5	弥生土器	甕				浅黄橙色	細砂	良好	
37	竪穴住居5	土師器	甕				灰白色	精良	良好	内外面に丹
38	竪穴住居5	土師器	高杯				橙色	粗砂	良好	

掲載番号	出土場所	種別	器種	計測値(cm)			外面色調	胎土	焼成	特徴・備考
				口径	底径	器高				
39	竪穴住居7	弥生土器	高杯				浅黄橙色	細砂	不良	
40	竪穴住居8	土師器	甕	(13.0)	(16.5)		黄橙色	粗砂・細砂	不良	外面に黒斑あり、風化激しく外面の調整不明
41	竪穴住居8	土師器	甕	12.0	(8.4)		灰白色	細砂	良好	
42	竪穴住居8	土師器	甕	(14.1)	(8.4)		褐色	細砂	良好	外面の一部に煤付着
43	竪穴住居8	土師器	鉢	13.6	4.7		黄橙色	細砂	良好	完形、外面下半部に灰色の斑あり
44	竪穴住居8	土師器	鉢	13.7	(3.9)		明褐色	精良	良好	
45	竪穴住居8	土師器	高杯	(6.7)	(2.5)		黒褐色	細砂	良好	
46	竪穴住居8	土師器	甕				にぶい橙色	細砂	良好	
47	竪穴住居8	土師器	高杯				橙色	精良	やや不良	
48	竪穴住居8	土師器	鉢				浅黄橙色	粗砂	良好	
49	竪穴住居8	弥生土器	甕				明赤褐色	細砂	良好	
50	竪穴住居8	弥生土器	甕				褐灰色	細砂・粗砂	良好	
51	竪穴住居8	弥生土器	高杯				浅黄橙色	細砂	良好	
52	竪穴住居8	弥生土器	高杯				明赤褐色	細砂	良好	
53	竪穴住居8	縄文土器	深鉢				にぶい黄褐色	礫	良好	
54	竪穴住居9	土師器	甕	15.0		(26.6)	灰白色	礫	良好	外面に黒斑あり、煤付着、底部内面に煤付着、ほぼ完形
55	竪穴住居9	土師器	甕	(18.3)		(15.0)	明赤褐色	粗砂・礫	不良	
56	竪穴住居9	土師器	甕	(15.6)		(13.9)	明赤褐色	粗砂	不良	外面胴部に煤付着
57	竪穴住居9	土師器	甕	(15.0)		(12.1)	にぶい橙色	精良	良好	口縁の一部に煤付着
58	竪穴住居9	土師器	甕	(15.0)		(8.6)	赤褐色	礫	良好	
59	竪穴住居9	土師器	甕	11.4		(15.0)	橙色	粗砂・礫	不良	外面胴部に煤付着、二次焼成か
60	竪穴住居9	土師器	甕	15.4		(17.4)	にぶい赤褐色	礫	良好	口縁～胴部に煤付着
61	竪穴住居9	土師器	甕	16.4		(13.0)	明赤褐色	細砂	良好	口縁～肩部に黒斑あり
62	竪穴住居9	土師器	甕	(16.6)		(13.2)	黒褐色	精良	良好	
63	竪穴住居9	土師器	甕	(17.4)		(6.5)	灰白色	細砂	やや不良	
64	竪穴住居9	土師器	甕	(13.0)		(11.0)	明褐色	粗砂	良好	
65	竪穴住居9	土師器	甕	(14.6)		(8.4)	黒褐色	精良	良好	
66	竪穴住居9	土師器	甕	(13.4)		(6.0)	灰色	細砂	良好	
67	竪穴住居9	土師器	甕	(15.0)		(3.5)	にぶい黄褐色	細砂・粗砂	良好	
68	竪穴住居9	土師器	甕	(11.6)		(8.8)	橙色	粗砂	やや不良	外面胴部に煤付着
69	竪穴住居9	土師器	甕				にぶい橙色	粗砂・礫	良好	
70	竪穴住居9	土師器	甕				浅黄橙色	細砂・粗砂	不良	
71	竪穴住居9	土師器	甕				灰白色	細砂	やや不良	
72	竪穴住居9	土師器	甕				暗褐色	粗砂・礫	良好	
73	竪穴住居9	土師器	甕				黒褐色	細砂	良好	
74	竪穴住居9	土師器	甕				浅黄橙色	礫	良好	
75	竪穴住居9	土師器	甕				浅黄橙色	粗砂	不良	
76	竪穴住居9	土師器	甕				にぶい黄褐色	細砂	良好	
77	竪穴住居9	土師器	甕				褐灰色	細砂	良好	
78	竪穴住居9	土師器	甕				褐灰色	細砂	良好	
79	竪穴住居9	土師器	甕				黒褐色	精良	良好	
80	竪穴住居9	土師器	甕				明黄褐色	粗砂	良好	
81	竪穴住居9	土師器	甕				褐灰色	精良	良好	
82	竪穴住居9	土師器	甕				黒褐色	精良	良好	
83	竪穴住居9	土師器	甕				明黄褐色	細砂	良好	
84	竪穴住居9	土師器	甕		10.3		にぶい褐色	細砂	良好	
85	竪穴住居9	土師器	高杯	15.7	11.0	11.4	浅黄橙色	粗砂	良好	完形
86	竪穴住居9	土師器	高杯	20.4		(12.0)	明赤褐色	精良	良好	
87	竪穴住居9	土師器	高杯	(11.8)		(4.6)	橙色	粗砂・礫	良好	
88	竪穴住居9	土師器	高杯	18.8		(5.3)	にぶい褐色	精良	良好	
89	竪穴住居9	土師器	高杯	15.5		(4.4)	明赤褐色	礫	やや不良	二次焼成か
90	竪穴住居9	土師器	高杯				黄橙色	粗砂	良好	
91	竪穴住居9	土師器	高杯		10.7		橙色	粗砂・礫	良好	
92	竪穴住居9	土師器	高杯			(6.5)	赤褐色	粗砂	不良	二次焼成か
93	竪穴住居9	土師器	高杯				明黄褐色	粗砂	良好	
94	竪穴住居9	土師器	高杯				明赤褐色	細砂	やや不良	
95	竪穴住居9	土師器	高杯			(7.2)	にぶい黄褐色	細砂・礫	やや不良	
96	竪穴住居9	土師器	高杯				灰白色	粗砂	良好	
97	竪穴住居9	土師器	高杯				橙色	細砂	良好	
98	竪穴住居9	土師器	鉢	15.6		(3.5)	にぶい褐色	精良	良好	

掲載番号	出土場所	種別	器種	計測値(cm)			外面色調	胎土	焼成	特徴・備考
				口径	底径	器高				
99	竪穴住居9	土師器	小型丸底壺	9.2		(7.7)	明灰褐色	精良	良好	ほぼ完形
100	竪穴住居9	土師器	小型丸底壺	6.6		7.5	明灰褐色	精良	良好	完形
101	竪穴住居9	土師器	小型丸底壺				にぶい赤褐色	細砂	良好	内外面に煤付着
102	竪穴住居9	弥生土器	甕				橙色	精良	良好	
103	竪穴住居9	弥生土器	甕				橙色	細砂・粗砂	良好	
104	竪穴住居9	弥生土器	甕				にぶい黄褐色	細砂	良好	
105	竪穴住居9	弥生土器	甕				にぶい黄褐色	細砂・礫	良好	
106	竪穴住居11	弥生土器	鉢	(23.4)		(7.6)	浅黄橙色	粗砂・礫	不良	
107	竪穴住居11	弥生土器	高杯	(14.8)		(3.3)	灰白色	粗砂	不良	
108	竪穴住居11	弥生土器	壺				浅黄橙色	細砂・粗砂	良好	頸部に櫛描沈線文
109	竪穴住居11	弥生土器	甕				にぶい黄橙色	粗砂・礫	良好	
110	竪穴住居11	弥生土器	甕				にぶい黄橙色	細砂	良好	
111	竪穴住居13	弥生土器	甕				橙色	細砂・粗砂	良好	
112	竪穴住居13	弥生土器	甕				浅黄橙色	細砂・粗砂	良好	
113	竪穴住居13	土師器	甕				明黄褐色	細砂	良好	
114	竪穴住居13	土師器	壺？				橙色	細砂	良好	
115	竪穴住居14	土師器	小型丸底壺？	(7.2)		(3.6)	浅黄橙色	粗砂	やや不良	
116	竪穴住居14	弥生土器	甕				にぶい赤褐色	細砂	不良	
117	竪穴住居14	土師器	甕				黒褐色	粗砂・礫	良好	
118	竪穴住居14	土師器	高杯	15.2		(5.1)	赤褐色	礫	不良	二次焼成か
119	竪穴住居15	土師器	甕				にぶい橙色	細砂	良好	黒斑あり
120	土壙3	土師器	甕				黄橙色	粗砂	良好	外面に煤付着
121	土壙3	土師器	高杯				浅黄橙色	粗砂	やや不良	
122	土壙5	弥生土器	甕				黄橙色	細砂	良好	
123	土壙6	土師器	甕				橙色	粗砂	良好	
124	土壙6	弥生土器	甕				黄橙色	細砂	良好	
125	土壙6	弥生土器	甕				暗褐色	細砂・粗砂	良好	
126	土壙6	弥生土器	高杯				橙色	粗砂	良好	
127	土壙7	弥生土器	壺				橙色	細砂	良好	
128	土壙10	弥生土器	甕	(14.2)		(10.0)	橙色	細砂	良好	
129	土壙10	弥生土器	壺				淡橙色	細砂・礫	良好	
130	土壙10	弥生土器	甕				橙色	粗砂	良好	
131	土壙10	弥生土器	甕				黄橙色	細砂	良好	
132	土壙10	土師器	甕				にぶい褐色	粗砂	良好	
133	土壙10	土師器	甕				褐色	粗砂	良好	
134	土壙10	弥生土器	高杯				にぶい褐色	細砂	良好	
135	土壙11	弥生土器	壺	17.6		(11.8)	橙色	粗砂	良好	頸部にヘラ描き沈線文
136	土壙11	弥生土器	高杯				橙色	細砂	良好	
137	土壙11	弥生土器	高杯		11.1	(7.4)	橙色	粗砂	良好	円孔３方向３列
138	土壙11	弥生土器	器台		(24.9)	(9.8)	橙色	細砂	良好	裾端部に刻文、鋸歯文
139	土壙11	縄文土器	深鉢				にぶい褐色	粗砂	良好	
140	土壙12	縄文土器	深鉢				にぶい黄褐色	礫	良好	
141	土壙12	縄文土器	深鉢				浅黄褐色	粗砂	良好	
142	土壙13	弥生土器	甕				浅黄橙色	粗砂	良好	
143	土壙14	弥生土器	甕				褐灰色	細砂	良好	
144	包含層	縄文土器	深鉢				橙色	礫	良好	
145	包含層	縄文土器	深鉢				にぶい黄褐色	粗砂	良好	
146	包含層	縄文土器	深鉢				明黄褐色	粗砂	良好	
147	包含層	縄文土器	深鉢				明褐色	粗砂	良好	
148	包含層	縄文土器	深鉢				灰褐色	礫	良好	
149	包含層	縄文土器	深鉢				明黄褐色	粗砂・礫	良好	
150	包含層	縄文土器	深鉢				にぶい橙色	粗砂	良好	
151	包含層	縄文土器	深鉢				明黄褐色	粗砂	良好	
152	包含層	縄文土器	深鉢				明黄褐色	粗砂	良好	
153	包含層	縄文土器	深鉢				暗褐色	礫	良好	
154	包含層	縄文土器	深鉢				灰黄褐色	粗砂	良好	
155	包含層	縄文土器	深鉢				橙色	粗砂	良好	
156	包含層	縄文土器	深鉢				明黄褐色	礫	良好	
157	包含層	縄文土器	深鉢				灰黄褐色	礫	良好	
158	包含層	縄文土器	深鉢				黄褐色	粗砂	良好	

掲載番号	出土場所	種別	器種	計測値(cm)			外面色調	胎土	焼成	特徴・備考
				口径	底径	器高				
159	包含層	縄文土器	深鉢				灰黄褐色	礫	良好	
160	包含層	縄文土器	深鉢				にぶい黄褐色	粗砂	良好	
161	包含層	縄文土器	深鉢				暗褐色	粗砂	良好	
162	包含層	縄文土器	深鉢				にぶい黄褐色	粗砂	良好	
163	包含層	縄文土器	深鉢				灰黄色	粗砂	良好	
164	包含層	縄文土器	深鉢				明黄褐色	粗砂	良好	
165	包含層	弥生土器	甕	13.2		(13.3)	浅黄橙色	細砂	良好	
166	包含層	弥生土器	甕	(15.5)		(5.1)	にぶい黄褐色	細砂	良好	
167	包含層	弥生土器	高杯		(12.2)	(8.9)	橙色	細砂・粗砂	良好	円孔４方向
168	包含層	弥生土器	高杯		(12.1)	(3.4)	にぶい黄褐色	細砂	良好	
169	包含層	弥生土器	器台？		(12.3)	(2.9)	浅黄橙色	細砂	良好	
170	包含層	弥生土器	台付鉢？		(9.5)	(4.9)	にぶい橙色	粗砂	良好	
171	包含層	土師器	甕	(15.8)		(4.5)	灰褐色	細砂	良好	口縁～頸部に煤の付着
172	包含層	土師器	甕	(16.0)		(5.3)	灰黄色	粗砂	良好	口縁～頸部に煤の付着
173	包含層	土師器	甕	(16.0)		(6.8)	橙色	細砂・礫	やや不良	
174	包含層	土師器	鉢？	(8.3)		(5.9)	橙色	細砂	良好	
175	包含層	土師器	鉢？	(3.4)		(3.1)	にぶい黄褐色	細砂	良好	
176	包含層	土師器	高杯		10.8	(6.4)	灰白色	粗砂	不良	
177	包含層	土師器	高杯		(10.1)	(9.2)	明黄褐色	細砂・礫	良好	

石器

掲載番号	出土場所	器種	計測値(mm)			重量(g)	残存状況	備考
			最大長	最大幅	最大厚			
S1	竪穴住居3	磨製石庖丁？	(76.0)	(11.5)	(5.5)	6.5	刃部片	
S2	竪穴住居5	砥石	156.0	68.5	59.0	1047.3	完品	
S3	竪穴住居7	砥石	121.5	76.5	58.0	964.3	完品	
S4	土壙3	磨製石庖丁	127.5	52.0	8.0	76.4	完品	
S5	包含層	石鏃	(15.0)	17.0	3.5	0.6	先端欠損	

金属器

掲載番号	出土場所	器種	材質	計測値(mm)			重量(g)	残存状況	備考
				最大長	最大幅	最大厚			
M1	竪穴住居2	鉄片	鉄	38.5	9.0	6.5	4.3		
M2	竪穴住居14	鉄斧？	鉄	(89.0)	67.0	9.5	73.1	欠損あり	
M3	竪穴住居14	鉄鏃の茎？	鉄	(52.0)	7.0	5.5	3.1	欠損あり	

1　調査区
全景空撮

2　竪穴住居１・２
切合い関係
検出状況
（東から）

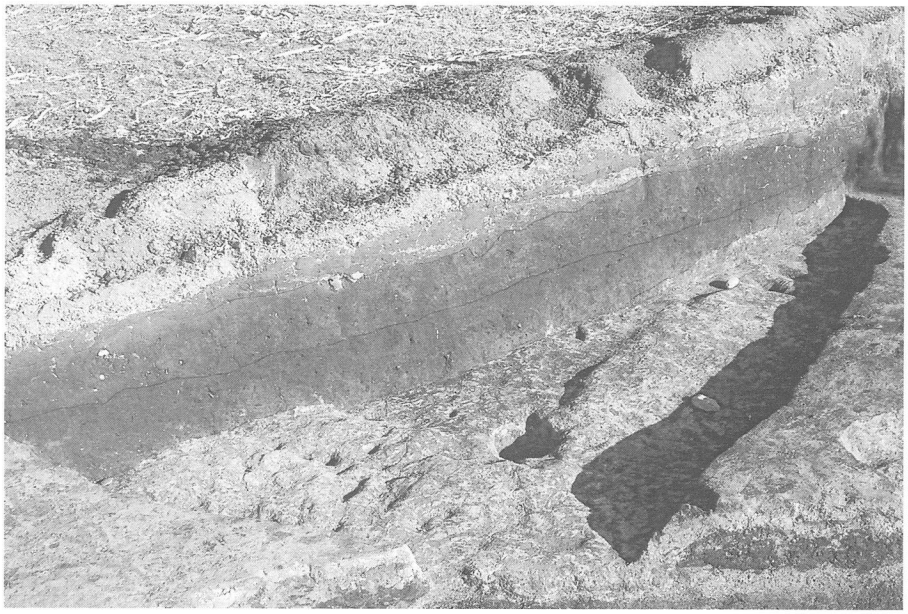
3　竪穴住居１
（東から）

図版２

１　竪穴住居２
（東から）

２　竪穴住居３
・土壙５
（東から）

３　竪穴住居４
・土壙６・７
（北から）



1　竪穴住居 5
（西から）

2　竪穴住居 6
（西から）

3　竪穴住居 7
（南西から）

図版４

1　竪穴住居８
（南から）

2　竪穴住居８
遺物出土状況
（北から）

3　竪穴住居９
覆土断面
（南から）

1　竪穴住居 9
中央部付近
遺物出土状況
（東から）

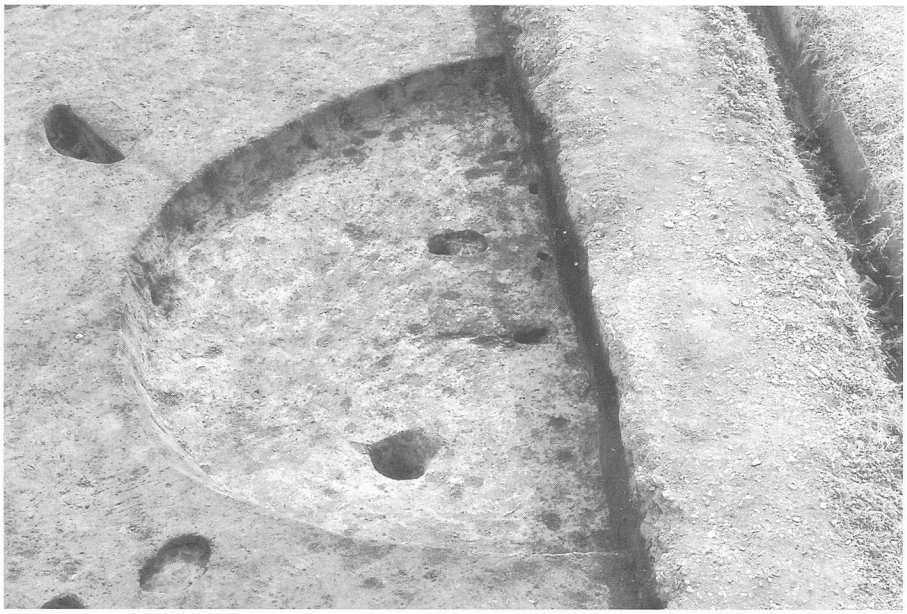
2　竪穴住居 9
遺物出土状況
（南から）

3　竪穴住居 9
遺物出土状況
（西から）

図版 6

1　竪穴住居 9
（南から）

2　竪穴住居10
（南から）



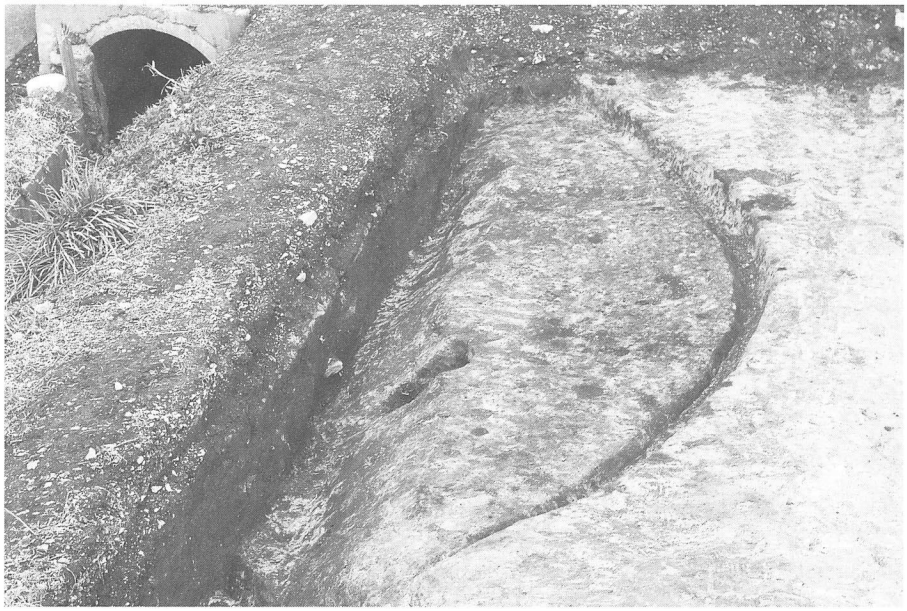
3　竪穴住居11
（北東から）

1　竪穴住居12・13
（南西から）

2　竪穴住居13
焼土・
炭化材検出状況
（南東から）

3　竪穴住居14
（南から）

図版８



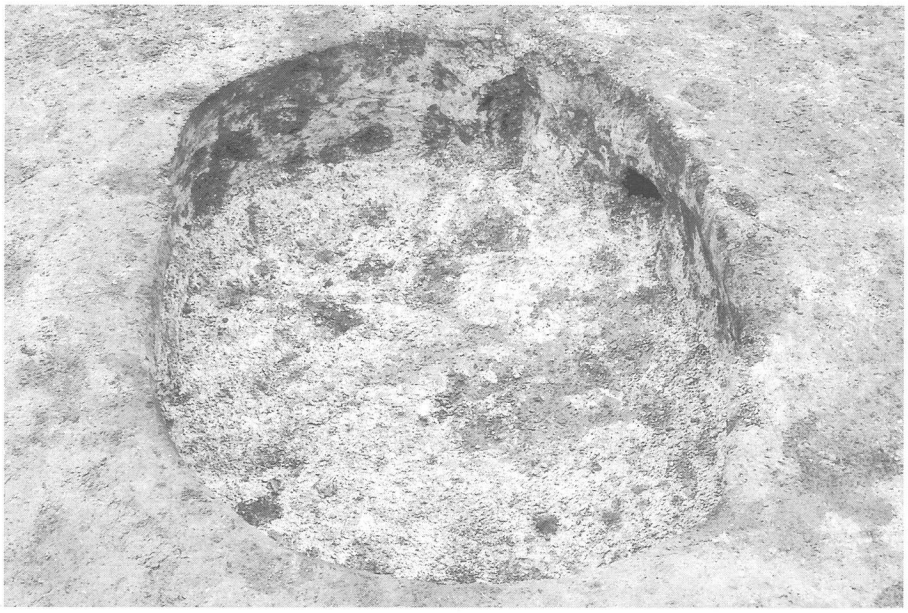
1　竪穴住居15
（南から）

2　土壙10・11
遺物出土状況
（北東から）

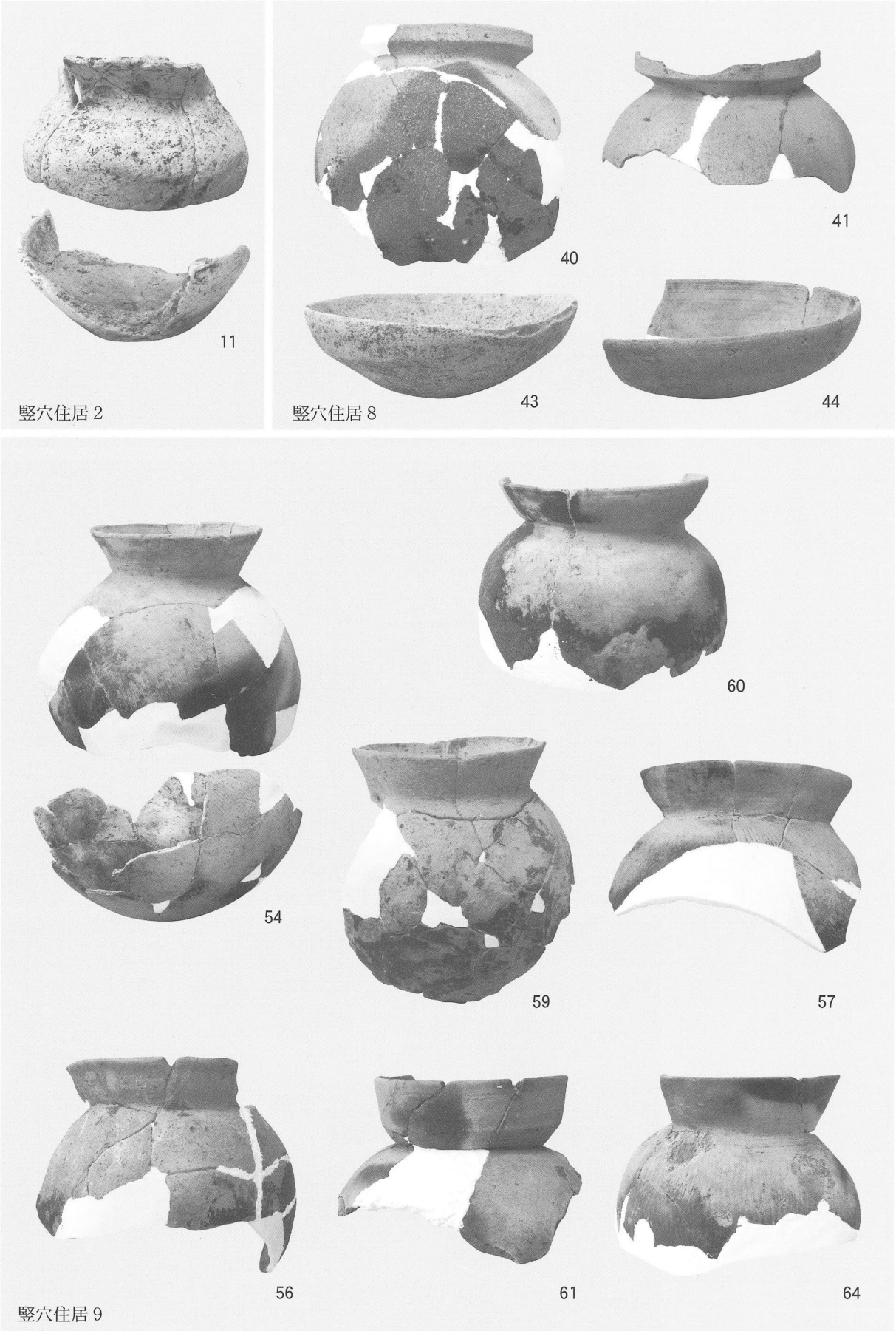
3　土壙10・11
（北東から）

1　土壙15
（南西から）

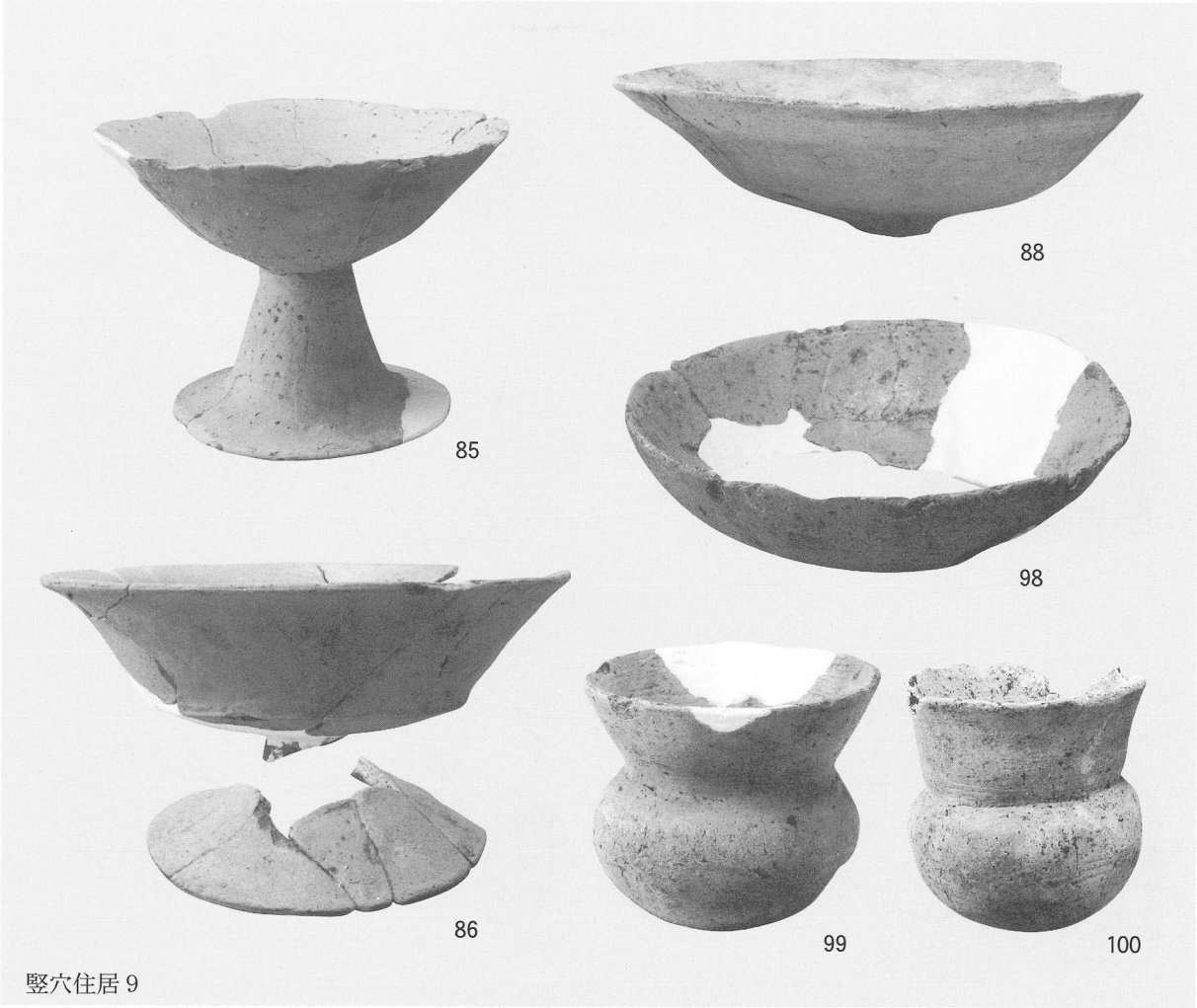
2　土壙16
（北東から）

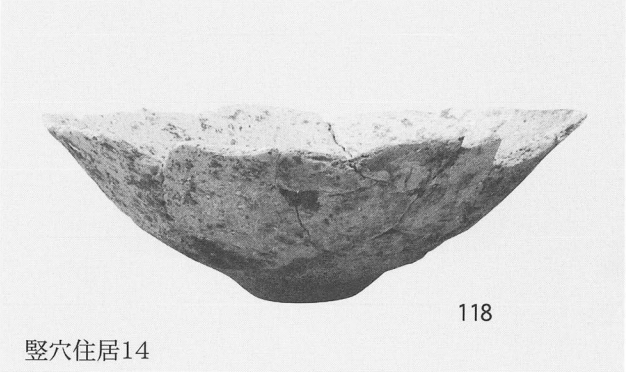


3　土壙18
（西から）



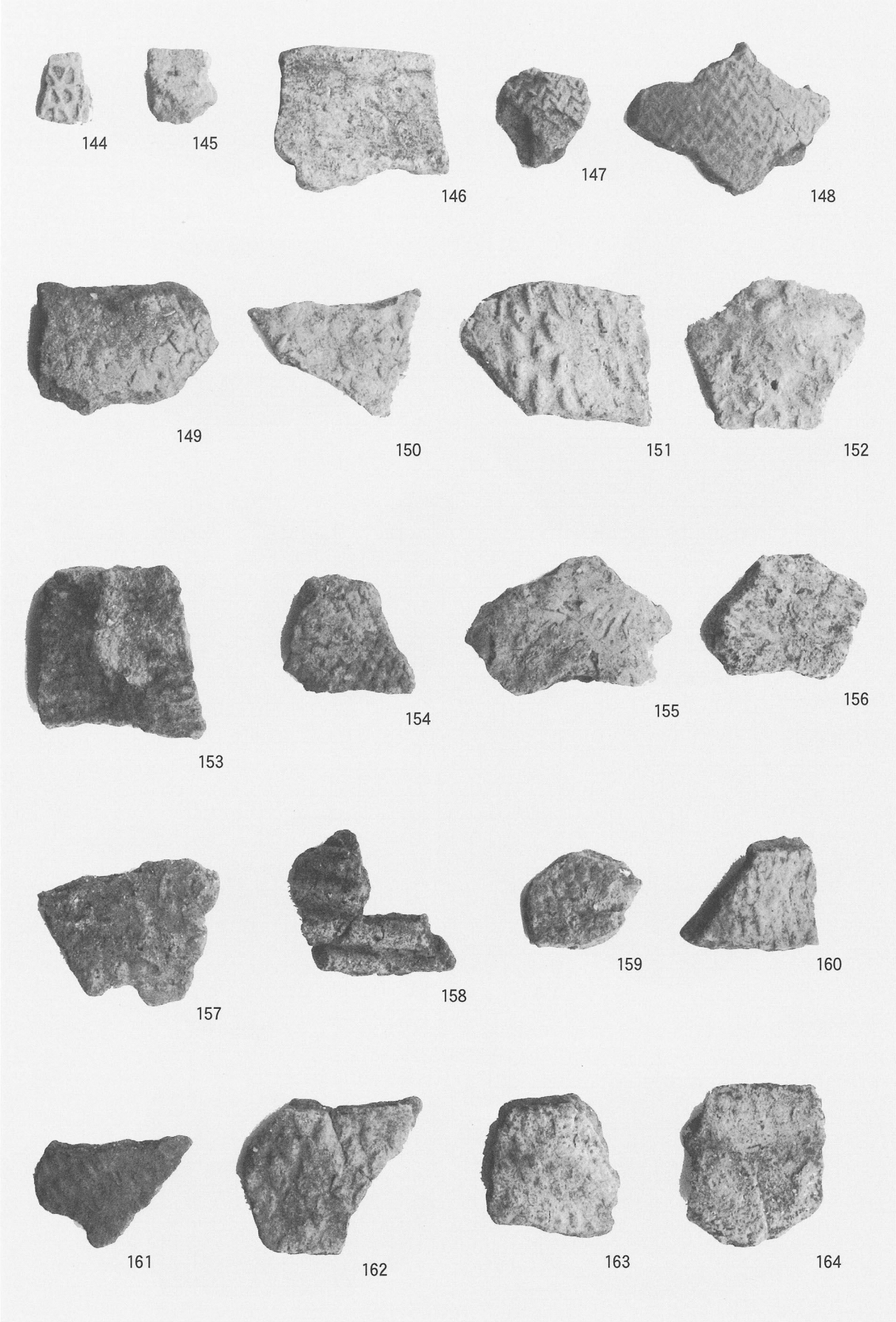
竪穴住居 2・8・9 出土遺物



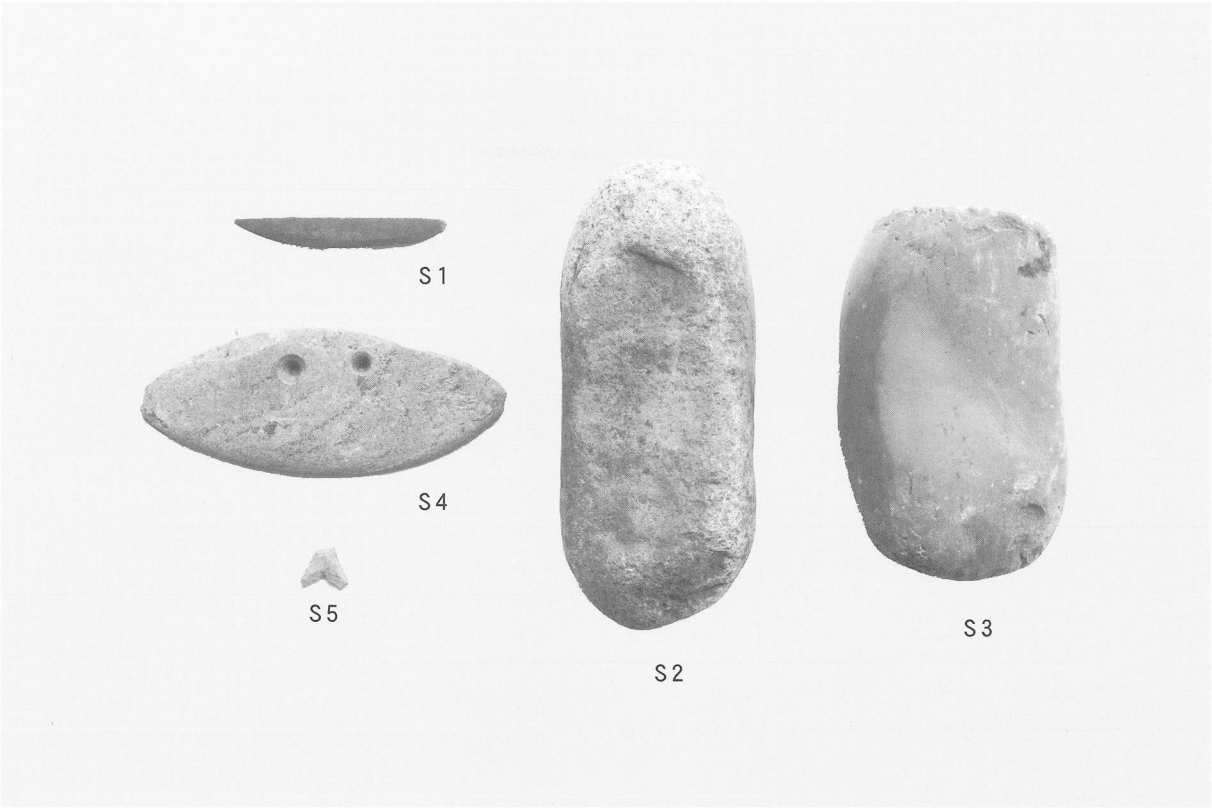


竪穴住居９・14・土壙11出土遺物

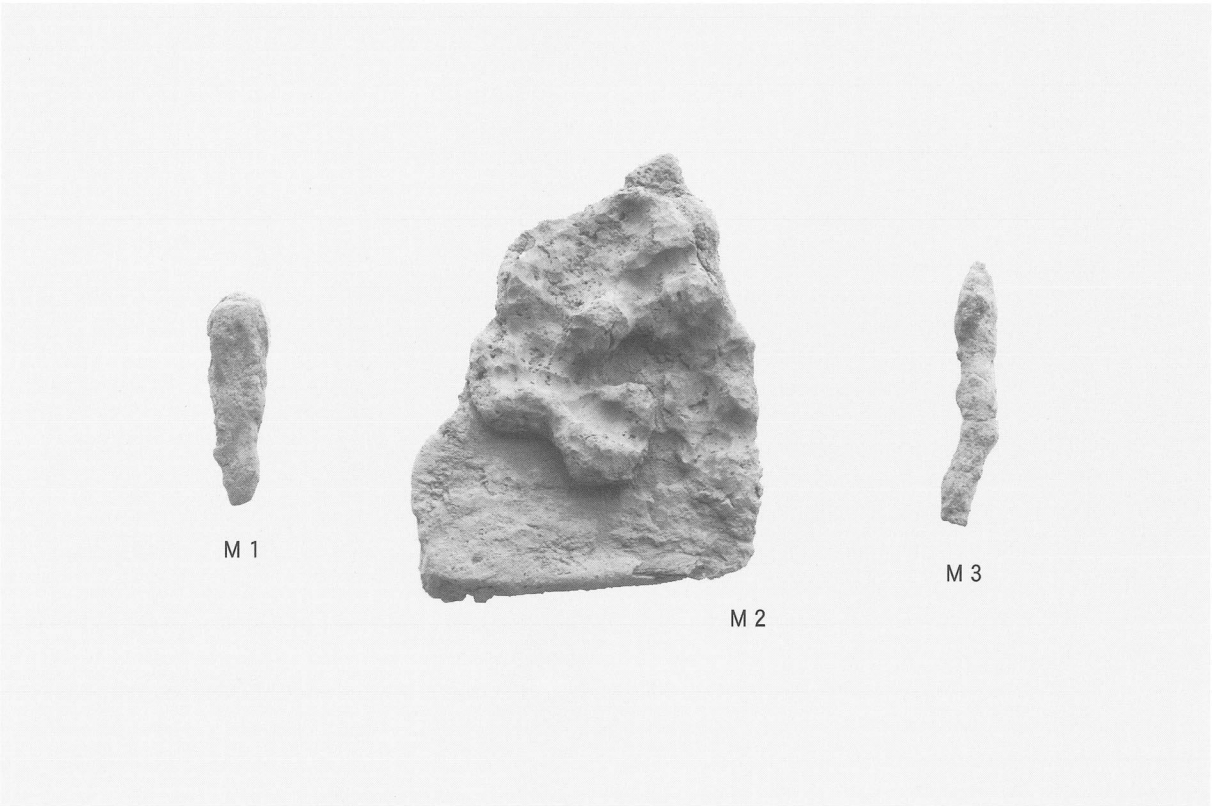
図版12


144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164

縄文土器



1　石　器



2　金属器

報　告　書　抄　録

ふりがな	おおだんいせきはっくつちょうさほうこく
書名	大旦遺跡発掘調査報告
副書名	市道上連線改良工事に伴う発掘調査
巻次	—
シリーズ名	真庭市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	2
編著者名	坂田　崇
編集・発行機関	真庭市教育委員会
所在地	〒719-3194　岡山県真庭市落合垂水1901番地5　TEL 0867-52-3730
発行年月日	2009（平成21）年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °　′　″	東緯 °　′　″	調査期間	調査面積	調査原因
大旦（おおだん）遺跡	岡山（おかやまけん）県 真庭（まにわし）市 台金屋（だいかなや）	33 214	旧久世町 191	35° 07′ 78″	133° 76′ 56″	20061211 ～ 20070323	1,290㎡	市道上連線建設に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大旦遺跡	集落	縄文時代（早　期）	包含層	縄文土器・石器	
		弥生時代（後　期）	竪穴住居・土壙	弥生土器・石器	
		古墳時代（前　期）	竪穴住居・土壙	土師器・石器・金属器（鉄器）	

真庭市埋蔵文化財調査報告２

大旦遺跡発掘調査報告

市道上連線改良工事
に伴う発掘調査

平成21年３月24日　印刷
平成21年３月31日　発行

編集・発行　真庭市教育委員会
岡山県真庭市落合垂水1901-5

印　　刷　作陽印刷工業株式会社